
恋姫†project ~おぜう様が逆幻想入り~

U.N.オーエン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋姫project ～おぜう様が逆幻想入り～

【Nコード】

N4091M

【作者名】

U・N・オーエン

【あらすじ】

暇を持て余した吸血鬼『レミア・スカーレット』はスキマ妖怪『八雲紫』の能力を使い、三国志の外史へと旅立った。はたしてどうなるのか？

作者は東方を殆ど二次設定系でしか知りません。

なので気軽な気持ちで読んでください。

恋姫の方でオリキャラが出ます。

プロローグ 暇（前書き）

初めまして、U・N・オーエンと申します。

諸注意等はここに書きますので、なるべく読んでください。（多分

無いと思いますが…）

ではよろしく願います。

プロローグ 暇

『敵将討ち取った!』

14インチのテレビの中の、綸子りんすを付けた男がフキダシ付きでそう叫んだ。

「……………暇ね」

テレビの前の少女はそう言つと立ち上がり、P 2の電源を落とす。再び紅く豪華な、しかし少し小さめの椅子に腰を下ろす。

椅子に座っているのは紅魔館の主、レミリア・スカーレット。

その幼い容姿とは裏腹に、カリスマ溢れる（時偶にブレイクするが…）吸血鬼だ。

そして近くにある鈴を鳴らす。

五秒と経たずドアがノックされる。

「咲夜です」

「入りなさい」

「失礼します」

入ってきたのは、紅魔館のメイド長こと十六夜咲夜いざなこ さいや。

「お嬢様、如何なさいましたか？」

「あのゲーム飽きたわ。何か他に面白いゲームは無いかしら？」

その発言に顔を咲夜は苦笑いを浮かべる。

「先程遊びになられていた、ゲームはもうクリアを？」

「ええ、もう全員レベルMAXまで上げてしまったし、全戦場クリアしてしまったわ。敵も弱すぎる」

「はあ……。でしたら幻想入りしたゲームで、お嬢様がクリアしていない物はもうありません」

溜息をつき、額に手を当てる。

「え？ たった40種だけなの？」

「はい。八雲殿も森近殿ももう持っていません。……何よりゲームのやり過ぎです」

「そ、そうかしら？」

「絶対にそうです。一日中部屋に引き籠ってゲームでは、どこの蓬萊人ほうらいと同じではないですか」

「う……でも何もする事が無いのだから仕方ないじゃない。フランだってまだ私に心開いてくれないし……。そこまで言うなら咲夜が私の遊び相手になりなさいよ」

「はあ……。私はまだ仕事があるので失礼します」

そう言つて一瞬で消えてしまった。

「あ、咲夜！ もう！」

再び椅子に座り、ぼーっと赤い壁を見つめる。

「三國志の時代に行きたいわね」

親友から借りた本と今さつき遊んでいたゲームを思い浮かべ、ボソツとそう呟いた。

「行きたい？」

突如、後ろから声がした。

「行けるならね。後、勝手に侵入はいらないで頂戴、紫」

そんな事を微塵も気にせず、声のした方を向く。

「あら、御免なさい」

レミリアが向いた方に、眼のような模様のある不気味な割れ目が浮かんでおり、その中心部に悪びれる様子の無い女性が居た。

彼女の名は八雲紫。やくもゆかり

見た目からは想像できないが、物凄い妖力を持った妖怪で、九尾の

狐を式神にして扱つかき使っているほどである。

「そ・れ・で、先程の話本当でしょうね？」

「勿論。私が物の境界を操れるのはご存知でしょう？」

「ええ」

「つまり、世界の境界も操れる訳なの」

「？ 時間で無くて世界？」

「ええ。時間の境界を弄もることはしたくないの」

「タイムパラドックスが起きるからかしら？」

「それも有るし、何より疲れるのよね。この歳になると何千何百年もの境界を超えるのはキツイのよ」

（何より説教はもう懲り懲りだしね〜）

「で、世界の境界というのはどういう事？」

「あなた、外史ガイシって知っているかしら？」

「民間で書かれた歴史書云々ってことでしょ？」

「辞書的に言えばね。要は、今この場とは同じように違う歴史の世界の事よ」

「と言つと?」

「貴方の言っていた三国志で言うと、赤壁の戦いで魏と呉蜀連合が戦ったわよね? その戦いで魏が敗れた。そこまでは良いわね? では、もしそこで魏が勝っていたら? もっと前に遡さかのぼって、もし董卓軍が連合軍を破って居たら? そう言った“もしも”の想像を形にした世界が、俗に言う外史なのよ」

「それで、その世界なら多少歴史を変えても良いのね?」

「ええ。多少なら」

「面白いじゃない。いいわ、行きましょう。外史へ」

「ふふ。じゃあ、ついて来て」

そう言うと紫はスキマの奥へと進んで行く。

レミリアも黙ってついて行く。

紫がレミリアの手をとり、外史の境界へと歩いて行く。

「逸はくれないでね? 探すの面倒だから」

しばらく歩いて目的の境界の前に着いた。

「ここよ」

紫がその境界を触ると、いつも見ているスキマの形に開く。

「ああ、そう。一つ良いかしら？」

「何？」

「この外史だけだね、結構特別な外史で、貴方の知っている三国志とは結構かけ離れた世界なの」

「というと、歴史自体も違うのかしら？」

「いいえ。基本的な事はほとんど変わらないわ。ただ、ちょっと色々…ね。まあ、実際見た方が早いでしょうけど…」

意味深にそう言うとウィンクする。

「忘れたのかしら？」常識は投げ捨てるもの『でしょ？』

「ふふ、そうね。さあ、行ってらっしゃい。今の貴女ならこの世界の日光ぐらいなら平気の筈よ。存分に吸血鬼の力を発揮できるわ。ただし、雨には気を付けて」

「ありがとう」

レミリアは短く礼を言うと、そのスキマへ飛び込んだ。

「健闘を祈って居るわ、レミリア。必ず平定して頂戴…」

紫は踵を返しスキマ空間から出て行った。

……余談ではあるがこの後、紫は咲夜にレミリアの所在を小一時
間問い詰められ、新聞屋に追い掛け回され、その新聞を読んだ映姫
に何事かと問い詰められ、半日近く説教された。

その顔は非常にやつれて居たそう。

プロローグ 暇（後書き）

如何だったでしょうか？

この話での外史云々は、作者の考えです。

改善点などがありましたら、一言の方に記入お願いいたします。

第一話 結盟（前書き）

おはようございます・こんにちわ・こんばんわ・初めましての方は初めまして。

第一話です。

投稿が大変遅れました。すいません…。

注意書きは特にありません。

ではお楽しみください。

第一話 結盟

荒涼とした大地と広がる青空。

いつもと同じ“空間”。

だがその空間が歪み、やや小さめに開く。

中からレミリアが出て来た。

「本当に来られるとは……。さすがね」

レミリアは、目の前に広がる荒涼とした荒野を見て、感じて、改めてスキマ妖怪の能力の凄さを実感する。

「さて手始めに：衣食住を整える事が優先ね。美味しい血が通った人間は居るのかしら？」

サラリと恐ろしい事を口にして、歩を進める。

しばらく行くと、荒野に人影らしき者が横たえているのが見えて来た。

（行き倒れかしら？ それとも囷かしら？ どちらにせよこの世界の地理に明るい者が必要ね）

レミリアは、その横たえている者に近づいた。

その男は、陽の光を反射する変わった服を着た青年だった。

「脈は…ある。息もしている…。武器らしき物も無い。大丈夫そう
ね。起きなさい！」

生きていることを確認すると、その青年を蹴り飛ばした。

「げふあ！ いきなり何すんだよ、及川！！ ……つてあれ？」

寝ていた彼は、蹴り飛ばされた事に憤懣ふんまんし跳び起きるが、怒りの対象である人物が居ない事に間抜けな声を上げる。

「おはよう、人間」

「う、うん、おはよう……じゃなくて！ ここは！？ そして君は
誰！？」

「名を聞く前に、自分が名を名乗るモノでは無くて？」

「う、それも…そうか。俺は北郷一刀。聖フランチェスカ学園の二
年生。とりあえず、北郷か一刀で良いよ」

「私は紅魔館の主、レミリア・スカーレット。レミリアと呼ぶ事を
許すわ。光栄に思いなさい」

「う、うん……アリガト」

（何だろ、この子凄く幼く見えるけど、何か圧倒されるような何か
が……）

目の前にいる少女の並ならぬ雰囲気を一刀は感じ取った。

「ところで一刀。貴方、この世界の人間じゃないわよね？」

「うん…多分。俺の通ってた学校にこんな険しい山とか無いし、地面もアスファルトとかコンクリートばっかで、ここまで荒涼とはしてなかった…と思う」

「そう…困ったわね」

レミリアは今一度荒野を見渡す。

だが眼に映る物はほとんど変わらない。

ゴツゴツした岩山に、草さえも生えて居ない荒野のみだった。

(何処かも分からない場所に頼りになりそうもないヒョロい人間…。
困ったものね)

現状にげんなりしつつ、何処に向かうべきか考える。

「すみません！ ちょっと良いですか？」

すると後方で、少女の声が聞こえた。

二人が振りかえると、そこには武器を携えた三人の少女が立っていた。

「え…と…君達は？」

「はい！ 私は劉備、字は玄德！」

ピンクの髪の少女が言い、

「鈴々は張飛なのだ！」

赤い髪の虎の髪飾りを付けた少女が言い

「関雲長とは私の事だ」

黒髪の少女が言った。

「……………はあ？」

(なるほど。これが紫の言っていた正史とのズレね。まさか女になっているとは思いにもよらなかったわ。…でもコレとこの男だけなのかしら？ だとしたら出発前に言えば済む筈では……………？ ……まあ考えても仕方ないわね)

「それで御使い様の名はなんというのですか？」

「お、俺は北郷一刀。字は無い。北郷か一刀と呼んで欲しい」

「私はレミリア・スカーレット。一刀と同じく字は無いわ。レミリアと呼んで頂戴」

(俺には光栄に思えとか何とか言ってたのに…。扱い酷すぎだろ)

「何か言ったかしら？ 一刀」

「イエ、ナンデモゴザイマセン」

「でもどっちが天の御遣い様でしょうか？もしかして両方ともなの
でしょうか？」

「「天の御遣い？」」

二人が同時に声を上げた。

「はい！ 天の御使いと云うのは、この乱世の大陸を平和にするた
めに天が遣わした天使様のことなんです！ そしてその使者がレミ
リア様と北郷様の事なんです！！」

（吸血鬼の私が天使ねえ……）

レミリアはやや不機嫌そうだが、劉備はさも嬉しそうに言う。

「しかし、その占いは只の戯言たわごとでは？」

関羽は訝いぶかしげにいう。

「でも言っていたじゃない、東方より飛来する流星の落ちた先に天
の御遣いが居るって」

「でも二人とも全然強そうに見えないのだ。特に小さく誰が強そう
じゃないって？」え？」

張飛の言葉は、鋭い怒気を孕んだ声に遮られた。

当事者は二人。

無論、北郷では無くレミリアだ。

プライドの高い彼女からすれば、今の張飛の発言は彼女に対する挑戦となる。

吸血鬼の彼女からしてみれば、三国の豪傑であることも同じ弱い人間に変わりはない。

彼女の眼は怒りで紅く揺らめき、その全身から溢れる覇気は目に見えそうなほど。

「矛を構えなさい、張翼徳」

「な、何で鈴々の字を知ってるのだ!？」

「無駄口叩いて無いで矛を構えなさい!」

只ならぬ怒気に少し怯むが、矛を構える張飛。

「お、お前も構えるのだ!」

「その必要は無いわ。己の武に奢り、見た目で判断する様な愚か者には素手で十分よ。殺す気で掛ってらっしゃい。それとも怖いのかしら?」

そう言ってレミリアは、構えも取らず腰に手を当て張飛の出方を見る。

「なにをー! そこまで言うなら目に物見せてやるのだ!」

挑発に乗せられ、蛇矛を我武者らがむしやに振り回す。

我武者らにと言えど、張飛の蛇矛は早い。

常人なら一合さえも受けられない。

しかし、如何いかんせん彼女は吸血鬼である。

全ての攻撃を紙一重で交わす。

それどころか、蛇矛を片手で止める始末。

「なっ!？」

「挑発に乗りやすいのも減点対象ね」

それだけ言って蛇矛を離す。

(なんて奴なのだ！ 鈴々の攻撃が片手で止められたのだ…。)

今までに類を見ない強敵を前に、張飛の中に小さな恐怖が生まれる。

自身の中に芽生えた微かな恐怖は、攻める勇気を萎えさせる。

「く…たりやああ!!」

張飛は萎えた勇気を奮い立たせ、渾身の一撃を繰り出した。

「フン、温いわね」

鼻で笑うと、先程と同様に蛇矛の柄を掴み、張飛ごと投げ飛ばす。投げ飛ばされた張飛は呆気に取られて反応が遅れ、地面に転がる。

張飛が起き上がる前に、レミリアが駆ける。

「勝負ありね？ 張翼徳」

張飛の喉元に鋭い爪を突き付け、勝利を宣言する。

「ま、参ったのだ…」

蛇矛を手放し、負けを認めた。

手を差し伸べ、張飛を起こす。

「り、鈴々をあれ程までにあしらうとは…」

姉である関羽は、レミリアの強さを見て驚嘆する。

「これで強さの証明には成ったかしら？」

薄く笑みを浮かべ、パンパンと服の埃を払う。

「あ、ああ。勿論だ」

「あの話を戻しますが、お二人共が御使い様なのでしょうか？それともレミリア様だけでしょうか？」

「いいえ。一刀も強くは無いでしょうけど、天の御使いよ」

「ええ！俺もなの!？」

「当り前でしょう？ その格好を見れば誰もがそう言っし、認めるわ。でしょう劉玄德？」

「はい！それは勿論です！」

「そう、なら良いわ。それと劉玄德、貴方に一つ確認したい事があるのだけれど？」

レミリアは真面目な顔をして、劉備の方へ向き直る。

「な、何でしょうか？」

先程の一軒も有り劉備は少し恐縮する。

「貴女の理想は何かしら？」

「理想…ですか。私の理想は、弱い人たちが虐げられず、戦も無く笑って過ごせるような世」はあ…。大言壮語ね「え!？」

レミリアはやれやれと言わんばかりに、溜息をついた。

「大言壮語とはどういう意味です？」

殺気立った関羽が話の間に入って来た。

「できそうもないことや威勢のいいことを言うことよ。それくらい

わかって居るでしょう、関雲長？」

「そついう事では無い！ できそつもない事とはどついう意味だ！
」！」

声を荒げ、今にも斬りかかりそつである。

「そのままの意味よ。弱い人たちが虐げられず、戦も無く笑つて過ごせる？ 馬鹿も休み休み言いなさい。如何に現実を見て居ないかが分かるわ」

「レミリア、流石に言い過「北郷！！」は、はい！」

止めに入ろうとした北郷の声はレミリアの鋭い怒声に遮られる。

そして、レミリアは北郷へ向き直る。

「北郷、貴方のいた世界とこの世界、どつちが便利かしら？」

「そ、それは俺のいた世界……」

「何倍くらい便利かしら？」

「何百倍も便利だと思つ」

「では、周りの環境は？」

「死ぬ物狂いでなくても、衣食住には困らない」

「平和だったのかしら？」

「……戦争は無かったよ」

「では犯罪は？ 他の国では？」

「犯罪は…減って無い。…人を殺す奴もいるし、人の物を盗む奴もいる。下手するとそれこそ毎日のように…。他の国では…いまだに内乱がある所も有るし、いまだに戦争も…無くなって居ない」

「分かったかしら？ 北郷のいた天では貴方達の世界よりも何百倍も便利で、衣食住も困らないにも関わらず、略奪や殺人は減らず、他国では争いすら無くなって居ない状況なの。劉玄德、貴女の理想がどれほど現実味を帯びていないか分かったかしら？」

「……………」

先程まであれ程憤っていた関羽でさえ口を閉じてしまった。

「じゃあ如何すれば…。私は如何すれば？」

「簡単な事よ」

レミリアは項垂れる劉備の手をとった。

「全てを背負う事よ」

「背負う??？」

「ええ。王の仕事は戦場で戦う事でも、頭を使う事でも無い。全ての責任を負い、全ての悪評を負い、民の為、部下の為、如何なるの

罪を被り、民を飢えさせず、才を埋もれさせぬ事。なにより現実から逃げ出さない事よ。貴女にできるかしら?」

「……はい! できます! いえやります!」

その答えを待つて居たと言わんばかりにレミリアは笑んだ。

「よろしい。では劉玄徳、私達の力と知恵、貴女に貸してあげるわ」

「達……って事は、俺も……だよねレミリア?」

「当り前よ、…嫌なの?」

「全然」

「よろしい」

「はい、ありがとうございます! あ、私の真名は桃香です! これからは桃香と呼んでください!」

「真名?」

「真名とは信用した者同士でしか呼び合う事を許されぬ神聖な名です。たとえ知って居ても本人が許さなければ決して口にはいけない名です。言えば斬首されても文句は言えません」

横から関羽が説明した。

「そして桃香様が預けたのなら私も預けねばなりませんね。我が真

名は愛紗です」

「鈴々は鈴々なのだ！」

「よし！ これで結盟だな！ 四人ともこれからよろしく」

「はい！ こちらこそよろしくお願いします、ご主人様！」

「え？ ご主人様？」

「勿論です！ 我々の盟主であるお二方が我々の主なのです」

「そうなのだ！」

「だ、そうよ一刀。良かったわねえいきなり可愛い三人の従者が出来て……」

一刀が慌てているのが面白いのか、ニヤケながら茶化すレミリア。

「そ、そんな事より！ これからの予定は立ってる？ えと、桃香さん？」

「さんなんて付けなくていいよ！ 一刀様とレミリア様は私たちのご主人様なんだから、ね？」

「う、うん」

「これからは、取り敢えず幼馴染の白蓮ちゃんの所に行こうかなーって。丁度今、義勇兵を募集してるらしいから」

「それは駄目よ」

「ふえ？」

「その幼馴染はおそらく、公孫「こそうざん」の事でしょう？」

「は、はい。よくご存じですね」

「まあ、ある程度は…。それよりも相手は私達よりも上の立場の間。たとえ幼馴染でも足元を見られるわ」

「となると、どっかで功績をたてるしかないのかな？」

「別にそんな事をしなくても、その辺の村から一人百人程度の兵を集めて行けばいいのよ」

「そこで公孫？の義勇軍として活躍すれば良い訳か…」

「その通り。その後、土地か何か貰えるでしょうから独立すればいいのよ。この近くに村は有る？」

「はい！ そんなに大きくは無いですけどあります」

「じゃあ、そこで義勇兵を集め、公孫？の所へ行きましょう」

「はい！」

「善は急げなのだ！」

こうしてレミリアは一刀・桃香・愛紗・鈴々の四人と結盟し、近く

の村へ行く事となった。

第一話 結盟（後書き）

如何でしたでしょうか？

おおよそ、投稿はこれくらいの速さです。

鈍筆ですいません（汗

改善点などがありましたら、一言の方に記入お願いいたします。 m

（ （ m

第一話EX 幻想郷（前書き）

おはようございます・こんにちは・こんばんは・初めましての方は初めまして。

第一話のEXです。

注意事項としては、

・ぶんぶんまるしんぶん文々。新聞が二次設定のデタラメ新聞という事になっている事

・オリジナルキャラ『妖怪の山の犬天狗』が出る事です（と言っても今の所出番は、名前が出るくらいで活躍しないでしょうが……）の二点です。

時系列は

・映姫 part 旅立った翌日

・紫 part プロローグ最後の「余談ではあるが」の部分です

ではごゆっくりしてね!!!

第一話EX 幻想郷

レミリアが外史へ旅立ち、桃香達と結盟をしているその一方で、幻想郷では水面下で大騒ぎになっていた。

事の発端は旅立った翌日の事……

side 地獄

「映姫様！ 大変ですよ！！」

地獄の映姫がいる部屋に死神のおのづか小野塚小町こまちが駆け込んできた。

「どうしたのです小町？ そんなに慌てて……」

映姫は小町に目もくれず、書類に目を通し判子を押ししたりしている。

「映姫様！ 仕事なんてしてる場合じゃないですって！！」

「小町……。貴女ねえ……。サボ」。小言は後で聞きます！ それよりこれを！」「つたく」

小町は懐からA4サイズの紙をとりだした。

「何ですかこれは？ ……文々。（ぶんぶんまる）新聞じゃないですか。こんなデタラ「良いから読んで下さい！！」わ、わかりました」

何時になく気迫の籠った小町の様子に押されつつ、その記事に目を通した。

「!?!? ……これは事実ですか小町?」

その大きな見出しを見た瞬間、映姫の顔つきが変わった。

「あたいは、こんな時に冗談なんか言いませんよ」

「……赤鬼」

「へい、何でしょうか?」

映姫は傍に居た、地獄の鬼のまとめ役の赤鬼を呼んだ。

「今すぐ鬼の数を確認しなさい」

「へい!」

短く返事をして赤鬼は走って行った。

「映姫様……」

「小町、今回ばかりは貴女のサボリ癖が役に立ちました。説教は無しにして上げます。その代わり、今すぐ藤原紅妹・十六夜咲夜・妖怪の山の犬天狗から話を聞いて来て下さい。そして八雲紫を呼んで来て下さい」

「わかりました!」

小町はそれだけ言って、走って行った。

「し、四季様あ！ てえへんです！！ 鬼の数が足りまへん！」

「そうですか…。分かりました、下がってください」

「へ、へい」

「はあ……………。困った事になりましたね…」

映姫は今一度記事を見直して、溜息をついて頭を抱えた。

机の上から新聞がヒラリと床に落ちる。

記事の見出しには『スキマ妖怪の犯行！？ レミリア及び妖怪多数
行方不明！』と書かれていた。

数刻後、紫は映姫に呼び出されていた。

呼び出し理由は、勿論伝統の幻想ブン屋こと『射命丸文^{しゃめいまるのあや}』が発行し
た『文々^{ぶんぶんまる}。新聞』の記事の見出しについてだった。

『文々。新聞』は元々過剰に盛った内容で外の世界の週刊誌も真
っ青な内容で知られる、云わばデタラメ新聞のこと

「来たわよ」

「八雲紫…貴女なぜ呼び出されたか分かりますか？」

「……外史への扉を開いた。それだけよ。何か問題有るの？」

「大有りです!!!」

「な、何よ？外史の扉の一つぐらいで……」

「これを読んでもそう言えますか？」

映姫は紫に『文々。新聞』を突き付けた。

「あの鴉天狗が書いた新聞じゃない。こんなデタラメを信じるの？」

「デタラメであつたらどれ程良かったでしょう……。残念ながら記事に書いてある通り、吸血鬼レミアは行方知れず、他にも数多の妖怪が居なくなっています」

「そんな筈無いわ!!! 私が外史へ連れていったのはレミアアだけよ!!! それにスキマは私以外では使えないわ!!!」

「そんなこと百も承知です。しかし幻想郷全体を見れば妖怪の数は半分以上に減り、その内訳は人食い妖怪ばかり。冥界や地獄からも鬼や亡霊が多数行方不明になっています」

「そんな……」

「紫、今回ばかりは貴女方は勿論、我々地獄の面々も動かなければなりません。白玉楼の面々は知りませんが……。しかし今すぐには動けません」

「何故？」

「下手を打つと外史そのものが消滅しかねません。そして正史・外史双方含めて歴史自体が崩壊する恐れがあります。そうなればその外史も勿論、最悪それに関わった幻想郷も消滅しかねません」

「それは……。じゃあ、いつ動くのよ？」

「妖怪が大量にレミリアの敵として現れた時です。できれば数十万単位で」

「……一気に殲滅するつもり？」

「いえ。なるべくなら捕獲したいのですがね。まあ凶悪な妖怪も多いので無理でしょうが……」

「じゃあどうするのよ？　もし有名な妖怪だったなら、幻想郷のパワーバランスが崩れるわ」

「その時こそ貴方のスキマの出番でしょう？」

「……レミリアは？」

「一応、やっていることは善行なので丸一日お説教で許してあげますよ」

「レミリア……可哀想に」

「何言ってるんですか。紫、貴女もですよ？」

「え……？」

映姫は黒い笑みを浮かべ、紫は冷や汗をかいた。

第一話EX 幻想郷（後書き）

すみません前書きでふざけ過ぎました。 m () () m

如何だったでしょうか？

ちなみに、閻魔様の名前は四季しき映姫えいきです。

改善点などがありましたら、一言の方に記入お願いいたします。

第二話 スカーレット・デビル（前書き）

おはようございます・こんにちは・こんばんは・初めましての方は初めまして。

第二話です。

早めに更新すると言ったのにこの様です。
本当に申し訳ありません。

さて注意点ですが…

・ハッキリ言って滅茶苦茶ですネ。

早朝に書き上げたので「最高にハイって奴だ！」状態で書いていたのでグロ描写が多いです。

・オリジナルで三人のキャラを出しました。今後出番はあるのでし
ようか…。

・レミリアとうとうカリスマブレイク！（ゆっくり化です。ゆっくり
りが嫌いな方、レミリア れめりゃの方はご注意ください。最後の
部分です）

やりすぎたかなと思いましたが投稿しました。
では第二話をお楽しみください。

第二話 スカーレット・デビル

side:レミリア

「? これは何かしら?」

桃香達と街へ向かう道中、何やら奇妙な跡を見つけた。

「足跡か? それにしては凄いな」

とても多く一直線に、私達の目的地へ向かって伸びている。

「行商人のモノでは?」

果たしてそうだろうか?

行商人と言っても、多くて数百人程度の規模だろう。

嫌な予感がするわ。

残念ながら私の勘はよく当たる。

500年間生きてきて、悪い予感だけはよく当たる事を実感した。

だが過信はしない。

.....やはり駄目か。

この世界に来て分かった事が一つあった。

なぜかこの世界では、運命が操れない。

操れないどころか見えもしない。

見えてもぼんやりと霞み、音は聞こえない。

「……行きましょう。こんな所で立ち止まっている暇は無いわ」

そう言って歩を進める。

胸騒ぎを押さえながら……。 Side out

しばらく歩くと、とても小さいながらも街が見えた。

「村ではないが着いた様ね」

「やったー！ 久々の街なのだー！」

鈴々が喜んで走って行く。

「あ、こら！ 鈴々、勝手に行くな！」

愛紗も走り出したその時、黒い煙が上がった。

「」「」「！」「」「」

「予感が当たってしまった様ね。急ぐわよ!」

レミリアが先頭をきって走って行く。

桃香達も同じく走り出した。

「……………これはひどい」

「悲惨ね」

周りに広がるは、ついさっきまで生きていたであろう骸と、家々に燃え広がる炎と黒煙。

血の臭いと人体の焼ける嫌な臭いで咽返りそうなほど。

斬られた者、炎に焼かれた者、踏み碎かれた者、犯された者…。

どの骸も、恐怖と苦悶の表情を浮かべていた。

右を見ても屍、左を向いても屍。

屍、屍、屍、屍、屍、屍、屍、屍、屍、屍…。

一刀は耐えられなかったのであろう、物陰で吐いている。

「桃香、これが現実よ。しっかりと目に、鼻に、耳に、心に焼き付けておきなさい」

「…はい」

「くそ！ 我々がもう少し早く来ていれば！」

「それは違うわ、愛紗」

「？ どういう事です？」

「私達が来て居ても同じよ。軍隊と領地を持たない私達にできる事なんて無いわ」

「そんな事！ 私達が来て居ればここまでの地獄は…」

愛紗が食って掛る、だが…

「驕り高ぶるな！」

すかさず怒号が飛ぶ。

「人の身であるお前が大群相手に敵うと思うのか！ せいぜい囲まれて殺されるか囚われて輪姦まわれるのがオチだ！」

いくら正論を述べようが、憤慨している愛紗の耳には入らない。

「そんな事ありません！ この私の武は殺戮と強奪しか知らん烏合の衆になんぞ引けは取りません！！！」

「それが驕りだと何故分らない！！ 戦場を経験していない未熟者がいきなり戦場へ出て敵うと思うのか！？ 今までとは数も質も違うのだ！！」

「私はそのような軟弱者ではない！！」

愛紗は主従関係を忘れ言い争う。

桃香も鈴々も二人の迫力と怒気に押され、止めるに止められない。

「ちょっと待って二人とも！ 今は言い争ってる場合じゃないだろ！！ 少しでも生存者を捜すべきじゃないのか！？ 二人ともまずは落ち着いてくれよ」

一刀は二人の間に入って二人を宥める。

「た、確かにそうでした。申し訳ありません、ご主人様」

「…確かにこんなことで時間を浪費する場合は無いわね。つい我を忘れてしまったわ。よく止めてくれた、一刀。……愛紗」

「は、はい 何でしょう…」

愛紗は気まずそうにレミリアの方を向く。

「私とした事が、熱くなり過ぎたわ、許して頂戴。だけど己の非も認めなさい。強くなりたいのならどんな時も驕らないようになさい」

「はい。私も己の立場も弁えず吠えてしまい、申し訳ありません…」

「とりあえず、俺とレミリアで向こうを回るから、桃香達はあつちを頼んだよ。くれぐれも気を付けて」

「うん分かった。ご主人様達も気を付けてね」

レミリア達は北を、桃香達は南を回って生存者を探した。

【レミリア& a m p · 一刀】

「本当に惨いわね。生存者なんか居るのかしら？」

「……ああ。……分からない。でも探さなきゃ……う……」

「一刀、無理しなくていいのよ？」

「……いや……大丈夫だ……。これぐらいで……へこたれてたら……
うう……これから先……もたないから…………つぶ……」

さっきからずっと嘔吐えずしており、喋るのも辛そうだ。

元は普通の学生なのだから無理も無い。

(普通の人間にしては大したものね)

少し感心しつつ、道順に沿って歩いて行く。

しばらく歩いたが、生存者らしき物は何も見つからなかった。

あと少しで村の北端に着く。

「ん？ レミリア、あれ！」

不意に一刀が指をさした。

その先には、燃えた家の前に子供が呆然と立ち尽くしていた。

二人は急いで駆け寄った。

「大丈夫か？」

「！ この人殺しめえ！！！」

「うわっと！」

「っ！！！」

声をかけるや否やその子供は、腰に佩いた剣を振りまわす。

「ちょっと待って！ 俺達は盗賊じゃないって！」

「騙されるもんか！ 同じ手には引つかからないぞ！！！」

「待ちなさい！ 人の話を聞きなさい！」

「うるさい！ お前等が来たせいでお父は、お母は、街は！！！」

「ちい！ 一刀、邪魔にならない所にいなさい！」

「え？ あ、うん……」

邪魔と言われ、ショックを受けつつも素直に離れる一刀。

（邪魔か……。まあ確かにそうだよな）

「私の話を聞きなさい！」

「五月蠅い！」

子供は聞く耳を持たず、我武者羅に剣を振り回す。

（ええい、これだから聞き訳の無い餓鬼は嫌いなものよ！！）

一気に間合いを詰める。

「え！？ うわ！」

剣の横っ腹を思いつ切り薙ぎ払う。

剣の刃は耐えきれず、五つに裂けた。

「落ち着きなさい。私達は盗賊では無いわ。逆にあなた達を助けに来たの」

「嘘だ！！！」

圧倒的力の差を見せられても未だ子供の闘志は消えず、素手で殴りかかって来る。

「その勇氣はかってあげるわ。でも勇敢と蛮勇は違うのよ」
聞き訳の無い子供に平手を打った。

「うっ、くう…」

平手打ちを食らって、少々落ち着いたのかももう殴りかかっては来なかった。

「少しは落ち着きなさい。私達は貴方達を殺しに来た訳ではない」

「…もしかして官軍の人？」

「ふん、あんな頼りにならない連中ではないわ。…そろそろ戻りましょうか」

「ああ。君も一緒に行こう」

「…うん」

少年を連れて、桃香達と別れた場所まで戻り、桃香達と合流した。

少年はその間に何もしゃべらずただ俯いて居た。

「そっちはどうだった？」

「はい、どうやら動ける人達は酒屋に集まっているようです」

「すぐ行きましょう。案内して頂戴」

「はい」

しばらく歩くと、結構大きな酒屋が見えた。

「ここです」

桃香達と共に酒屋に入る。

無傷の者や、包帯を巻いている者、半身が焼け爛れている者達がなく座っている。

何とも無気力な、生きる事に絶望した大人達の巣窟だった。

「あ、あの、みなさん…」

桃香が恐る恐る声をかける。

注目が一斉に集まる。

目が死んでいる。

「…あんた達は何モンだい？」

村長らしき男が、口を開く。

「我らは戦乱を憂い、黄巾党を殲滅せんと立ちあがった者だ」

「つてことは官軍か!？」

今まで落ち込んでいた村人全員が、期待の眼で見つめる。

「いや、残念だが官軍では無い」

「なんだ……………」

失望して、がっくりと肩を落とす。

「でもみんなを助けたいのは本当だよ！ 皆で立ち向かおうよ
！」

「けっ！ 只の餓鬼に何が出来るってんだ…」

「鈴々は餓鬼じゃないのだ！」

「相手は四千の大軍だぞ!？ こんな小さな街、すぐに落とされち
まうよ」

「でも戦ったんでしょ？」

「勿論だ！ 自分の家や家族が手を掛けられているってのに黙って
みてられる訳ねえだろ!？」

「だがこのままでは無理だ！ いっそのこと逃げた方が良い！」

「馬鹿を言うな!! 先祖代々の土地だぞ！」

それを皮切りに喧しく言い争う。

だがその内容は一向に纏まらず、混乱するばかり。

そんな中、

「いい加減になさい！！！」

ついに耐えきれなくなったレミリアが、こめかみに青筋を立て、机に拳を振り下ろした。

机は見るも無残に碎け散った。

「ひ……」

村人たちは言い争うのを止め、恐怖に顔を引きつらせて、レミリアの方を向く。

「貴方達ねえ、さつきから聞いて居れば何様のつもりかしら？」

「な、何様と言いますと……？」

「やれ何故官軍が来ないだ、やれ好き勝手やった役人が悪いだなどと……。甘えるのもいい加減にしろ！！！」

「ひい！」

「だ、だがよ嬢ちゃん、非力な俺達がどうやってあいつ等に勝ってんだよ？」

「黙れ下郎、それくらい自分で考えな。貴様等の街だろっ？」

「そ、そんなご無体な！」

「逃げるなり、立ち向かうなりすれば良い話でしょう？」

「で、ですが…」

「レ、レミリア、俺達は弱い人たちの為に立ち上がったんだから、力を貸さない…」

横から口を出した北郷を睨んだが、考え直した。

「……なら力を貸してやらんでも無い」

「ほ、本当ですか」

「私達が味方に付けば、黄巾の賊など何と言う事は無い。何と云っても天の御遣いが味方した軍だからな。ただし、見返りはこの街の支配権だ。ここの県令を追い出すなり処刑するなりすれば問題あるまい？」

「県令なんざとつくの昔に逃げちまったよ。自分の家族と財産を持つてなあ」

「なら話は早い。いい？ 私との契約は悪魔の契約。私は契約を違えない。だからお前達も違えるな。もし、違えたならば…」

「た、違えたならば？」

「この街は地図上から消えると知れ」

「か、畏まりました！」

「劉備、関羽、張飛」

「……は、はい（なのだ）！！」「」

「兵の事に関してはお前達に任せる。使えそうな者達を集めて一刻後に東門に来なさい」

「……お、応（なのだ）！！」「」

それだけ言うとレミリアは酒屋から出て東門へと向かった。

「な、なんておっかないお嬢ちゃんだ……。悪魔みたいだな」

「あ、あの方は天の御遣いで無く、悪魔の遣いじゃ。くわばらくわばら」

酒屋の中に居た街民は口々に恐ろしさを語った。

その一方でレミリアは……

（フフフ……。流石私ね。最近は従者にも妹にも嘗められていたけど、私のカリスマも捨てたもんじゃないわね！ 見事なまでに決まったわ！ あの人間達の間抜けな面と言ったら……。久しぶりの恐怖の視線……。思い出しただけでゾクゾクするわ……。ビデオに撮って置きたかったぐらいね！！）

満足げに鼻歌交じりで東門に向かっていった。

一刻後

「お嬢様！ 全軍揃いました！」

愛紗の声に振り向くと、東門の路地に綺麗に整列した農民達が見える。

「宜しい。とりあえず数と、たたくべき敵本拠地の確認！」

「はっ！ 兵数は約500程度！ 敵はこの先の古びた砦！」

皆、愛紗達に何か吹きこまれたのか、決意に満ちた顔をしている。

「死ぬ覚悟は良いか！？ では行くわよ！」

『応！！！！』

レミリアの一軍は一路、黄巾党の潜む砦へと前進した。

それから進む事、数刻。

「スカレット様！ この先に古びた砦を発見！ 黄巾党の根城でございますー！」

先に放っていた偵察が帰って、報告をした。

「ご苦労様。さて本番ね……。鈴々、怖いのかしら？」

いきなりの指摘に、鈴々は体をビクンとさせてレミリアを見た。

「こ、怖くなんかないのだ！」

「嘘仰い。^{やじ}手が震えているわよ」

「うっ……」

レミリアの指摘通り、鈴々の手は震えていた。

「恥ずかしがる事じゃないわ。貴方達にとってはこれが初めての^{おお}大戦^{いくさ}。それも此方の約8倍の大軍……。震えて当然だわ」

「レミリア……。ホントに勝てるのか？ 兵力差八倍だぜ？ 何か策があるのか？」

心配そうに声をかける一刀。

「あるわよ？ 最上にして至高の策が」

「！ どんな策ですか！？」

「ふふ、それはね」

吸血鬼説明中……………。

「な、何を考えておいでですかお嬢様！」

「そつなのだ！ 危険すぎるのだ！」

「そうですね！ そんなことしなくても私達が……」

劉義三姉妹は必死に止める。

「レミリア…正気だろうか？」

「ええ。勿論」

「分かった」

「な！ ご主人様！」

「大丈夫よ。この策こそが最も被害が少なくて済むわ。私一人が頑張ればいだけですよ」

「で、ですが！」

「安心なさい。私は不老不死よ？ それに幻想郷とかではスカーレット・デビル紅い悪魔と呼ばれて恐れられていたのよ？ たかだか4000程度の雑魚どっつてことないわ。無論、これは驕りでも無ければ満心でも無いわ」

自信満々に言っただけのける。

「……でもどうして？」

「味方は厳しくも無限の慈悲を、敵は気に入らない奴は残酷なまでに殺せ。そう教わったし、それが私の信条だからよ。だから安心なさい。未熟な貴方達は私が守ってあげるから」

「「「お嬢様（レミリア）……」」」

レミリアはぶっきらぼつにそう言ってそっぽを向いてしまった。

劉義理三姉妹は頬を少しだけ紅く染めた。

一刀はレミリアの頬は少し紅染しているのを見逃さなかった。

(ツンデレミリア…。うん、我ながらうまい事言った)

一刀はニヤケながら呑気な事を考えていた。

そして、ついに砦の前にまでやって来た。

砦の門はすぐに開かれ、黄巾党が門からぞろぞろと出てくる。

レミリアは黄巾党の一軍にゆっくりと、しかし堂々と歩み寄った。

空気を胸一杯に吸い、大声を張り上げた。

「聞け！ 獣の如く本能でしか行動できぬ愚か者達よ！ 我は天の御遣いの一人、スカーレット・テレル紅い悪魔こと、レミリア・スカーレット！！ 貴様等、烏合の衆を蹴散らす者の名前だ！ 我に討たれた事を地獄の閻魔に自慢するがいい！！」

宣言した後に、しばしの沈黙が流れる。

その沈黙を破るように、黄巾党の軍勢から笑い声が上がる。

「おいおい、お譲ちゃん頭大丈夫かあ？」

「たった一人で俺達5000の軍勢に敵う訳ねーだろお！」

「ヒヤッハッハ！ せいぜい可愛がってやんよお！！！」

様々な挑発が飛ぶ。

「…所詮は馬鹿の集まりか。策の件頼んだわよ！」

「はっ！ お嬢様のご武運をお祈りいたしております」

「お嬢様、ご無事にお戻りください」

「必ず帰ってくるのだ！」

「ふふ…分かっているわ。よく見ていなさい、桃香、愛紗、鈴々、
一刀！ これが戦場よ！」

そう言ってレミリアは、黄巾党の軍勢に向かって走り出した。

そして懐から一枚のカードを取り出し、掲げる。

「神槍『スピア・ザ・グングニル』！！！」

するとカードは禍々しくも美しい深紅の神槍へと変わる。

「さあ、狩りの時間よ！！！」

そう言って敵本陣を目指し、突撃した。

Side…レミリア

グングニルを片手に私は一心不乱に走る。

ただそこに居る獣達を狩るために。

神槍の一薙ぎで数十人の首が飛ぶ。

紅い鮮血が噴き出し、私の体を紅く染める。

不味い！

とても飲めたものではない。

元より獣のどす汚れた血など頼まれても飲みたくない。

薄汚れたなどと優しいものではない。

だが血には変わらない。

久しく離れていた命の危機…。

私は本能の赴くまま、グングニルを振り回す。

それだけで賊の胴が飛び、首が飛び、臓物が飛び散る。

時に、爪で引き裂き、吸血鬼の腕力で臓物を抜く。

逃げようとする者は、私のノーマル弾幕をお見舞いしてくれる！

逃げようとした者達は弾幕に巻き込まれて、跡形も無く吹き飛んだ。

恐怖に引き攣った顔を掴み、力を込め破裂させる。

頭蓋骨が有ったのかさえ分からない柔らかい感触。

圧迫による反動で、力を込めていない方に血が飛び散る。

指の間に残る生温かい脳髓。

足元に落ちた眼球…。

周りの黄巾党の畏怖の眼差しと苦悶の声、仲間達からの畏怖と畏敬の念が籠った眼差し…。

ああ、コレよ！

この感覚よ！

久しく忘れていたこの狂気！

圧倒的な力を持ってして行う蹂躞！

あの夢中になってやった無双^{ゲーム}を今！

自分が！

この手で！

やっているという一種の充実感！

私はグングニルを掲げた。

S i d e o u t

S i d e : 一 刀

信じられなかった。

彼女の強さは、並ではない。
レミリア

5000の兵を相手に、たった一人で押している。

いや、それは語弊かも知れない。

彼女一人で、5000の兵を虐殺している

!!

正直驚いたなんてもんじゃない。

知らず知らずの内に、全身が震えている。

喉は異常に渴き、腰なんて今すぐにでも抜けそうだった。

嘔吐感なんて吹っ飛んでいた。

首が飛ぶのさえ可愛く見えた。

愛紗達も、呆然と突っ立って見ている。

唯一桃香は、心に刻もうと目を逸らさず見ていた。

視線をレミリアに戻す

その周りは死屍累々。

まさに地獄絵図。

全身に返り血を浴びたレミリアは残酷なまでに美しく、戦慄を覚えた。

命乞いをする黄巾党達。

レミリアは無機質な声で断った。

紅い槍が掲げられる。

…次の瞬間、俺は走りだしていた。

何故かは分からないし、考えたくも無かった。

「もう良い！ それくらいで十分だ！」

そう叫んで彼女の背中に抱きつき、その手を掴んだ。

e o u t

S i d

「もう良い！ それくらいで十分だ！」

「……放しなさい一刀」

その声は、無機質で冷たく、トーンが低かった。

「嫌だ」

「命令よ、放しなさい」

「絶対に嫌だ！」

「……………何故？」

「もう充分だろ？」

「わがまま気に入らないから殺す。それは私の信条よ、一刀。それを貴方の我儘で曲げろというの？」

「命乞いをしてるじゃないか」

「だから？」

「赦してやれよ！！」

「貴様は馬鹿だ一刀」

レミリアの声色がさらに低くなる。

殺気が一刀に向けて発せられた。

一刀はその変化に気付いたし、その殺気に対して本能が警鐘を激しく鳴らすがそれを無視した。

「こいつらがどれだけの人を殺したかは知っているだろう？」

「ああ。それでもだ！」

「^{ケダモノ}獣は反省などしない。だからここで殺さねばなるまい。それを望んだから挙兵したのだろう？」

「でも…！」

「……もういいわ。じゃあ平和的に多数決と行きましょつか」

鋭い殺気も消え、グングニルを下げる。

そして残った賊の数名を義勇軍の真ん前に放り投げた。

「この者の処分は貴方達が決めなさい。殺すか生かすか……。さあどっち？」

「き、決めなさいと言われても…」

「な、なあ？」

村人たちは、先程の虐殺劇を見て復讐心など何処ぞへ行ってしまった。

「た、頼む！ 助けてくれえ！！」

「な、何でもする！ 償いもするから命だけは…！」

「た、頼むよお…！」

賊たちは額を地面に擦りつけて、泣いて命乞いをしていた。

必死に命乞いをする様を見て、街兵たちはどうしていいやら分からなくなった。

生かせば、レミリアの怒りを買うことは間違いない。

かと言ってあの惨状を見て、情が移ったのか、殺すのも憚られた。

ざわざわと騒ぐだけで、一向に判断がつかない。

「……………はあ。もう良い。興奮めしたわ」

『えっ?』

「飽・き・た・の!」

まるで駄々っ子のように、両手を振り下ろす。

「あ、飽きたって……………って「「「ええええええええ!?!」「」」

突然の変化と、突拍子もない発言にレミリアを除く全員が、タイミング良く素っ頓狂な声を上げる。

「見苦しい姿見てたらなんだか殺すのが面倒になったわ。お前達」

『は、はい…』

「今回はその惨めな姿に免じて許してあげるわ」

『あ、ありがとうございます…!』

「特別に私たちの元で雑用係として働いて貰うわ。良いわね？」

『誠心誠意込めて働かせて頂きます…!』

「そう言う事よ。さあ帰るわよ。汚らわしい返り血も落とさなきゃならないし。お前達、名前は？」

「性は韓、名は忠。真名は阿門です」

「性は孫、名は仲。真名は拍玄でございます」

「性は趙、名は弘。真名は鶴であります」

「そう。せいぜい励みなさい。働き次第では將軍職に就かせてあげるわ。仲間になった限りはお前達も守ってあげる。だから裏切ろうなんて思わない事。いい？」

『あ、有難き幸せにございます…!』

三人は跪いた。

新たに三人の従者をしたがえて、レミリア達は街へと戻った。

当然のごとく、黄巾党はレミリア一人で倒してしまったので被害は

皆無。

悲しむ者も居なく、レミリアは満足気だった。

「では約束通り、レミリア様、一刀様、劉備様。この街をよろしく
お願いいたします。この後酒宴が有りますので広場に着てください」

レミリアは街長から、印を預かった。

「任せなさい。この私が居る限りこの街は滅びないよう、善処する
わ」

「頼りにしております」

街長はそう言って部屋から出て行った。

レミリアは四人に体を向けた。

「…私が大々的に戦に出るのは今回だけよ。これで私の噂は全諸侯
に知れ渡るでしょうね」

「お嬢様、何故あんな無茶を？」

「他の諸侯たちに私達の名を売り出すためよ。それと、私が居ると
いう危険性を示したの」

(呂布の戦果までは届かなかったけど…ね)

「危険性？」

桃香は首をかしげる。

「劉備の所には恐ろしい悪魔がいるぞーって宣伝したのよ？ わざわざ攻め込んでくるような愚か者はいないはずよ」

屈託のない笑顔を見せるレミリア。

「……でも」

「大丈夫。今回のように一人で大軍を相手するのは最後よ……」

………
（多分）

「今小さく多分って言わなかったか？」

「そ、そんなことどうでもいいのよ！ さ、さあ酒宴に行くわよ！」

「にへへへへ　一足先に行ってご飯なのだ　……！」

鈴々は嬉しそうに走って部屋から出て行った。

「あ、コラ、鈴々！」

続いて愛紗も駆けて行く。

「あ！ 二人とも待ってよ　……！」

桃香も部屋から出て行った。

「一刀」

「何？」

「恐れずよく止めてくれたわ。ありがとう」

「良いつて別に。仲間だろ？」

笑顔で言っただけのける彼にレミリアも小さく微笑んだ。

「フフ…。じゃあ行きましようか！」

レミリア達も街の広場に向かった。

街総出で行われた戦勝祝いは夜遅くまで続いた。

桃香は悪酔いして、一刀に絡んでいた。

がしばらくすると酔いつぶれて寝てしまった。

そして主役のレミリアはというと…。

「うー　うー　」

何をどうしてそうなったのか、レミリアは生首だけになっていた。

無論斬られてはいない。

ゆっくり化して一刀の頭の上で、飛び跳ねていた。

「あ、あの〜レミリアさん?」

「うー?」

「何でそんな格好に?」

「うー! うーうーうー!」

「いや分かんないから」

「うー うー」

何が面白いのか満面の笑みで、一刀の頭の上で飛び跳ねる。

「スカーレット・デビル 紅い悪魔と同一人物だとは思えないな…」

頭の上を跳ねていたれめりやを捕まえて、膝の上に乗せる。

「うー?」

微笑んでレメリヤの頬を突いたり撫でたりしていた。

「うー うー」

「…何この生き物、めっつさ可愛い!」

レメリヤの可愛さには嵌りつつ、色々はと撫でまわす。

気持ち良かったのか、何時の間にかレメリヤは寝ていた。

小動物のように眠るレメリヤを見た彼も眠気に誘われ眠ってしまっ
た。

その様子を見ていた愛紗は、とても顔が紅かった。

第二話 スカーレット・デビル（後書き）

如何だったでしょうか？

黄巾の三人は黄巾党の史実武将より引用しました。

列伝等は、他の話で紹介します。（三国志V E I I風に）

更新が遅れて本当に申し訳ありません。

なるべく早く投稿できるよう善処します。

改善点などがありましたら、一言の方に記入お願いいたします。
感想を書いていただいた皆様に感謝！

武将名鑑 (話の展開によって増えます) (前書き)

大変お待たせしてしまい申し訳ありません。

紹介するのを忘れておりましたので紹介します。

話が進み次第増えていきます。

武将名鑑 (話の展開によって増えます)

性：韓^{かん} 名：忠^{ちゆう} 字：不明
真名：阿門^{あもん}

性別：男

能力 戦闘：70 知力：36 政治：30

特技：強行 水攻 穴攻

役職：遊撃部隊長 雑務係

遊撃部隊長の一人。主に、兵を率いて前線で戦う役目を担う。やや気が短いので挑発に乗りやすい。

性：孫^{そん} 名：仲^{ちゆう} 字：不明

真名：拍玄^{ぱくげん}

性別：男

能力 戦闘：40 知力：67 政治：63

特技：火矢 偵察 天文

役職：遊撃部隊長 お茶入れ係

遊撃部隊長の一人。遊撃部隊の軍師的存在^{ブレイク}。礼儀正しく落ち着いているが、調子に乗りやすい。

性：趙^{しやう} 名：弘^{こう} 字：不明

真名：鶴^{かく}

性別：男

能力 戦闘：58 知力：52 政治：51

特技：医術 鼓舞 収拾 修復

役職：遊撃部隊長 伝達役

遊撃部隊長の一人。主に、猪武者の阿門とお調子者の拍玄の抑え役。

いたって普通で何事も平均的にならず。影が薄い。

武将名鑑 (話の展開によって増えます) (後書き)

本題の方はまた今月中に別個で更新します。
大変お待たせしてしまい申し訳ありません。

改善点などがありましたら、一言の方に記入お願いいたします。
この作品を読んで戴いた方々と感想を書いていただいた方々、評価
して下さった方々、お気に入り登録して下さいました方々、皆様に感謝！

第三話 幽州啄郡（前書き）

おはようございます・こんにちは・こんばんは・初めましての方は初めまして。

第三話です。

妙に筆が進みましたが、何となくやっつけ感が有りますね。特に注意書きはありません。では第三話をお楽しみください。

第三話 幽州啄郡

Side:レミリア

幽州啄郡。
ゆうしゅうしやくくん

私達が手にした土地。

この県令として祭り上げられ半年が過ぎた。

私達は、街の復興に力を入れつつ、周りに集る黄巾党を掃討する毎日を過ごしていた。

私は余り街の民達とは触れ合わなかったが、桃香達の話ではもう仲良くなってきたとの事だ。

街の民達は笑顔で過ごしている。

だが苦勞は絶えないだろう。

日々を苦勞して一生懸命生きる“守るべき者達”。

“守るべき者達”か…。

私の考えも随分と変わったようだ。

思えば私の考えは、幻想郷あでこに行つて変わった。

昔は、人間なんて思っていた。

だが今は違う。

私の傍には従者さくやが居て、癩癩フラン持ちの妹と病弱バチエな親友には白黒魔理沙が居る。

そして何より、幻想郷という理想郷を護るために紅白霊夢が居る。

(丸くなったのか…？ この私が？)

「ふふ、甘いものね」

嗤わらいつつ、部屋を出る。

足早に一刀の執務室へと向かう。

二回ほどノックする。

「びびぞ〜」

中から返事が返って来たので中へ入る。

「失礼するわ」

「どうかしたのかレミリア？」

書類から目を離して私の方を向いた。

「どうかしたのかではないわ。分かっているのですよっ？」

そう言って吸血鬼特有の発達した犬歯を笑んで見せる。

一刀の顔がやや青くなる。

「げっ！ もうそんな時間か…」

「げっ、とは何よ。淑女レディに向かって失礼ね。私に血を吸われるのだから、少しは喜びなさい」

「…別にいいけど」

そう言っつて一刀は上着を脱いで、背を向ける。

「素直でよろしい。ではいただきます」

両手を合わせ拜む。

私は一刀の頸筋に牙を突きたてる。

「くっ」

牙は難なく肌を貫通し、血管に傷を付ける。

「んく…んく…」

何故かは知らないが一刀の血は、他の人間に比べ美味しい。

桃香達より味が濃く、脂分も丁度良い。

育つ環境の違いでこうも違うのだろうか？

お腹一杯になった所で、牙を引き抜く。

「ごちそうさま。また明日も頼むわね」

「あ、ああ。お粗末さまでした…」

力なく手を振る一刀。

私は手を振って部屋から出た。 Side out

執務室を出たレミリアが、次に向かったのは調練場。

「せえやああああ!!」

「うりやりやりやああ!!」

そこではすでに愛紗と鈴々が訓練をしている真っ最中だった。

「お手並み拝見…ね」

そう言っつて木にもたれかかる。

「はい、はい、はいいい!!!!」

青龍刀で連続突きを繰り返す愛紗。

「ほっ! よっ! てあ! あ…」

弾けるモノだけ弾き、後は避ける鈴々。

だが、軸足がズレてバランスを崩す。

「貰ったあああ！」

青龍刀の一撃で蛇矛が弾かれ、放物線を描いて地面に刺さる。

「流石ね、愛紗」

「あ、お嬢様」

「にゃ？ あちゃー、レミアにはカッコ悪いところ見られたのだ」

「こ、こら、鈴々！ お嬢様に向かって失礼だろう！」

「別に構わないわ、愛紗。それよりも鈴々」

「にゃー？」

「さっきの打ち合いだけでも、全然だめじゃない」

「うっ！」

「軸足がズズレじゃあ話にならないわよ？ 今は稽古だから良いけれど、実戦では他の雑兵に打ち取られるのが落ちよ？」

「そ、そんなこと分かってるのだ！」

レミアの指摘にムキになって、反発する鈴々。

「まあ良いわ。それよりも構えなさい。何処でズレているか教えてあげるから」

「わ、分かったのだ」

矛を構える鈴々。

レミリアは、ポケットからカードを取り出し掲げる。

「神槍『スピア・ザ・グングニル』」

「あ、相変わらず物々しいのだ」

「ふふ、褒め言葉と受け取っておくわ」

「では、はじめ！」

愛紗の合図で、鈴々が突進してくる。

「うりゃ、うりゃ、うりゃりゃ〜!!」

相変わらず、何のフェイントも無い単調な攻撃。

「駄目ね。そんな単調な攻撃では雑魚は倒せても、将は討ち取れない。少なくとも愛紗には一生勝てないわ」

「むう！ ならこれはどうなのだ!!」

攻撃の単調性を指摘され、矛先だけでなく石突きも加えての攻撃を繰り返す。

「まだまだ赤点ね。どちらにしても勝てる訳ない…わ！」

そう言ってレミリアはグングニルで上段を薙ぎ払った。

「！！ お見通しなのだ！」

「愚門ね」

溜息をつくとき、グングニルの軌道が変わった。

「じゃ！？」

軌道は隙だらけの下段に変わり、矛先の出っ張った部分が鈴々の足を狙う。

「じゃっとー！」

間一髪で跳ねて交わす。

「隙だらけよ！ー！」

足が地面に着く直前の隙を狙って、体当たりを食らわせる。

「ぐふ！ ぐく…！」

予期していなかった攻撃に対処できず、鳩尾に肩突を食らい嘔吐く。

「ホラ如何したの？ もうお終いかしら？」

「ま、まだまだなのだ！」

その後も、転ばされたり、ど突かれたりと、厳しい調練が行われた。無論、只ど突くだけではなく、今の何処が駄目だったとか、どのよ
うに捌くべきだったのかをアドバイスしてやっていた。

(ふふ…、まるで姉妹の様だな)

そんな二人のやり取りを見ていて、愛紗はふとそう思った。

結局鈴々はレミリアに一本も攻撃を当てられずに終わった。

「つ、次こそは必ずギャフンと言わせてやるのだ!!」

「ギャフン。ふふ…これで満足したかしら？」

小馬鹿にしたように鼻で笑って、レミリアは城へと戻って行った。

「むっ〜！ 馬鹿にして〜！！ 絶っつ対、一本取ってやるのだ！
」

鈴々はその後ろ姿を地団太踏みながら見送っていた。

(あ、案外子供の様ですね…)

レミリアの見せた、子供っぽい仕草に苦笑いした。

「さあ、鈴々！ 稽古の続きをするぞ！」

「勿論なのだ！！」

二人は獲物を構え、再び打ち合った。

城の中を何する訳も無く、警備がてらふらふらと歩きまわる。

結局なにも無く日も沈んだので、する事も無くなり、自室に戻った。

「ふう、なんだか疲れたわ。柄でも無い事をするモノではないわね」

「お疲れ様です、お嬢様。お茶でもいがかでしょうか？」

レミリアの自室には、従者の代わりとして拍玄が控えている。

「ええ。いただくわ」

彼ら三人は、あの討伐戦の後雑用係兼レミリアの従者として召抱えられた。

最初は、愛紗達から痛い目線攻撃を浴びせられていたが、レミリアと桃香のはからいで『捕虜や投降兵に侮蔑行為を行った者は厳罰に処す』といった内容の規律が作られた。

お陰で三人は余計なストレスを感じる事無く、仕事をしている。

「どござ」

「ありがとう」

湯呑みに注がれたお茶を飲みながら、拍玄を見た。

「？ 如何なさいました？」

「貴方達三人はホントによく働いてくれているわね」

「光栄の至りでございます」

「そろそろ貴方達も將軍職に就かせてあげても良い頃じゃないかしら？」

「そ、そんな！ 私共では務まりません！」

「……私の目に狂いは無い筈よ？ それとも私の目は信用ならないのかしら？」

眼を細く、鋭くして睨む。

「と、とんでもございません！」

「じゃあ、受けてくれるわね？」

満面の笑みを浮かべる。

「わ、分かりました」

「安心なさい。Three man cell…三人一組で仕事に

当たって貰うわ。良いわね？」

「は、はい！ 精一杯務めさせていただきます！」

「この事は明日の軍議で発表するから、他に二人にも伝えておきなさい」

「ははっ！ 失礼いたします」

そう言って拍玄は部屋を出て行った。

「ふふ…。愛紗達がどんな顔するか楽しみだわ」

軽く笑んで、ベッドに身を投げ出した。

すいません取り乱しました。
PVが12,387アクセス、ユニークが2,956人行きました。
びっくりです。ユートピアです。

さて本題に戻りまして。
如何だったでしょうか？

黄巾党の三人結局どうしようか迷った結果、將軍として働いて貰う事にしました。

その辺の詳しい設定等は、後のち考えて投稿しておきます。

あと一つアンケートで、感想の方に美鈴さんの事が出ましたので、アンケートを取りたいと思います。

- 1 早めに出す
 - 2 作者の案件通りにする。(終盤あたりに出現)
 - 3 その他(他の人を出す。ただし一人まで。あまり強すぎる方は無しになる かもしれませぬ)
の三つの中から選んでください。
無ければ無いで、このまま進んでいきますので、気軽な気持ちでお答え下さい。
- 別に一人くらい増えても物語には影響しなく、キャラの影が薄くなる事はありませんので大丈夫なはずです。
よろしく願います。

改善点などがありましたら、一言の方に記入お願いいたします。
この作品を読んで戴いた方々と感想を書いていただいた方々、皆様に感謝！

第四話 曹操襲来（前書き）

おはようございます・こんにちは・こんばんは・初めましての方は初めまして。

第四話です。

遅くなりました。

タイトル通り曹操さんが登場です

注意書きは

・曹操さんが前作（恋姫十無双）の性格そのままの所ですかね。

では第四話をお楽しみください。

第四話 曹操襲来

朝の軍議。

今朝の軍議は何時もより騒がしかった。

何故なら、皇帝より全諸侯に黄巾党討伐令が出されたからだ。

「対応が遅すぎるわね。如何に無能かが分かるわ」

「確かに」

「今回は、平原の黄巾党の陣営を叩きに行きます。どうやら公孫？の領地付近に黄巾党が皆に籠っているのを発見したらしく交戦。苦戦しているとの事で、援軍を求める文が来ています」

「名を上げるにはいい機会ね。それに、兵力も増強できるわ」

「……まさか、黄巾の兵を取り入れるのですか？」

レミリアの増強という言葉に、良い顔をしない愛紗。

「当たり前でしょう？ それとも何？ 気に食わないの？」

「……………い」沈黙は肯定の証よ、愛紗「う……………」

レミリアは苛立たしげに眉間に皺を寄せる。

「あのねえ愛紗、私達は今、弱小無名の只の集まりに過ぎないのよ

？ そんな私達が黄巾の兵を取り込まずに大きく成れると思ってる？

「し、しかし…」

「しかし、何？」

「……………」

「はつきり言いなさい」

「……や、奴等は賊軍で、私達は義勇軍ですよ？」

「だから？」

「そんな賊兵を我らの兵達に組み込む訳にはいきません！」

「そんなに嫌なの？」

「べ、別に私は…」

「じゃあ問題無いじゃない。無論嫌でも無理やり組み込むけど」

「私ではなく民がどうお「そんな事知った事ではないわ」っ！？」

「民がどう思おうと、私の知った所では無い。民の生活を護るために兵を集めるのよ？ 国を富ませ、兵を強くし、その兵に国を護らせる。第一に民達は自分の生活を護つてくれる太守を必要としているのよ？ 民達はそのためだけに太守わたしたちについて来る。だから太守わたしたちは、そのためにどんな手段でも使わなくてはならないのよ？」

「し、しかし！」

「くどい！」

なおも食い下がる愛紗に、レミリアの怒号が玉座に響く。

「貴女はただ、黄巾党の連中が嫌いなだけでしょう？　只それだけの個人の我儘で国が衰退する様な事はあってはならない事よ！」

「くっ……。申し訳ありません」

愛紗は俯き、肩を震わせていた。

「どのような身分の者でも、器量や才が有れば採用し、重用するのは乱世の習いよ」

「え、え〜っと？　一応これで軍議は終わり…かな？」

「いえ、まだ私からの知らせが有るわ。…入ってきなさい」

『失礼します』

入って来たのは、レミリアの従者の三人。

「？　阿門達がどうかしたのか？」

「私達は今、非常に人材不足なのでね。彼らに三人一組で将を務めて貰う事にしたの」

「な！」

「????」

「え!?! 聞いて無いよ!?!」

「当たり前よ。私の独断なのだから」

さも当然と言った様に言つてのけるレミリア。

「納得いきません! 何故、黄巾党の連中に将を務めさせるのです!
務まる訳がありません!! そもそも……」

「黙りなさい、関雲長。規則を忘れたのかしら?」

「ぐっ……」

規則の事を出され黙ってしまう。

「この三人は元黄巾党の司令官よ? 鍛え様によつては、化けるんじゃないかしら?」

「それはそうですが……」

「……裏切らないよな?」

「当たり前よ。私への畏怖を植え付けてあるのだから。ねえ?」

さも楽しそうに三人を蛇が獲物を見るような眼で見る。

『き、教義に誓つて裏切りません!?!』

顔を青くして震える三人。

「ははは…。大丈夫そうだな」

その様子を見た一刀は苦笑いを浮かべる。

「一刀からも許可が出たから良いわよね、桃香？」

「うん。阿門さん、拍玄さん、鶴さん。兼業で大変でしょうが頑張ってくださいね！」

『誠心誠意働かせて頂きます』

「では、取り敢えずお前達には700の兵を預けるわ。遊撃手として頑張りなさい」

『はっ！』

「愛紗も良いわね」

「はい」

「では解散！一刻後に隊ごとに整列し、公孫？軍を救援する！各自早急に準備せよ！」

『応！（なのだ！）』

「貴方達は今日はお留守番。街の防衛に努めなさい」

『はっ！ お嬢様、ご武運を！』

三人を残しレミリアは、玉座を出て行った。

Side 公孫？

眼前に立ちはだかる砦門…。

思った以上に多くの黄巾党が籠って居るらしく、とてもじゃ無いが今の兵力じゃ無理だ！

「報告します！ 後方より砂塵！ 援軍が来ました！」

おお、やっと来てくれたか！

「曹操か！？ 牙門旗は？」

これで曹操が来たなら、勝てはしなくても領地内の侵入は防げそう
だ。

「はっ！ “劉”・“関”・“張”・“十”、何も書かれていない
深紅の牙門旗です！」

「“劉”……。あつ！ 桃香か！」

この近くに赴任したのか…。

「面会を求めています。が如何致しましょう?。」

「今すぐ会おう! 通してくれ!。」

「はっ!。」

そうか。桃香かあ。

盧植先生のここ以来だな。

それでもってスカーレット・デビル紅い悪魔…。

たった一人で5000の黄巾党を蹂躪した猛者。

噂通りか確かめるいい機会だな。

噂通りなら戦力になるし、噂通りで無くとも交渉素材の一つとして使えるな。

「此方になります。」

「白蓮ばいれんちゃん、久しぶり!。」

考えている内に来たようだ。

「よう、桃香! 久しぶり。援軍感謝するよ。」

あの頃とあんま変わって無いな。

「伯珪殿、再会の所申し訳ないですが、後ろの方々の紹介をお願いしたいのですが？」

おっとそうだったな。

「我が名は関羽。字名は雲長」

「鈴々は張飛なのだ！」

「俺は北郷一刀。一応、天の御遣い」

「私はレミリア・スカーレット。紅い悪魔と名乗った方が早いかしら？」

ええ！？

こんな幼子が紅い悪魔！？

「貴女、今とつっても失礼なこと思ったでしょ？」

…ばれてるし。

「気のせいだよ気のせい！」

「貴公があのスカーレット殿か。是非とも実力話拝見したいものだ」

「そう言えば貴女の名前を聞いていなかったわね？」

「これはこれは。失礼した。私は趙雲、字を子龍。以後お見知り置きを……」

「では軍議を始めよう。桃香、お前の所に兵はいくつ居る？」

「ん〜、ざっと3500ぐらいかなあ？」

そんなに居るのか！？

「そ、そうか。でもまだ足りないなあ」

「？ 敵はどれほどの規模なの？」

「ざっと見積もって10000は下らないだろう」

「10000!？」

「我らの兵を合わせても7500が良い所。籠城する相手には不利も良い所です」

籠城を攻略するには最低でも三倍の兵力を用意しなきゃならない。

平原での戦いならなんとかかなりそうだが…。

不味いな。

「…私に良い考えが有るわ」

「ほ、本当か!？」

「興味深いですな」

「まず、敵に一当てして、銅鑼の合図ですぐに撤退。その後皆から兵が出るまでこれを繰り返す。どう、簡単でしょ?」

「そんなにうまく行くのか?」

「籠城する相手にこれ以外の策は無いわ。それとも何か考えがある者は居る?」

確かにそれ以外ないが…。

「伯珪殿、この案で行きましょう」

「星、正気か!?!」

何を言い出すんだこいつは!

「こんな賭け紛いの策でうまくいくとは思えない!! それに援軍も…」

「本当に来るのかしら?」

言葉が詰まった。

…正直な所、来るかどうかは分からない。

でも、賭け事紛いの戦をするよりは幾分かましだ。

何より、もし黄巾党の連中が出て来ずに、援軍でも呼ばればそれこそ全滅は必至だ。

「伯珪殿、今は少しでも小さな確率に賭けてはみませぬか？」

「星……」

正直な所、スカーレットの言った策以外で、敵を殲滅する方法は無い。

他の諸侯が小勢力の私達に力を貸すとも思えないし……。

「……………分かった。その策で行こう！ 各員出撃準備！ 一刻後に砦に籠る黄巾党を誘き出す！」

『応！（なのだ）』

不安はあるがやるしかない。

私も準備するでしょう。

S i d e o u t

「では作戦通りに一当てして、銅鑼の合図で退却。良いわね？」

「はい！」

「応なのだ！」

「今回、私は敵が出てから出る。それまで持ちこたえなさい、分か

った？」

「お任せ下さい！」

「鈴々に任せて置けば百人力なのだ！」

「ふふ、頼もしいこと…」

「二人とも気をつけてな」

「はい。御気遣いありがとうございます」

「へへ、大丈夫なのだ！」

「では行ってきます！ 行くぞ者共！ 数が多かろうと臆する事は無い！ 天が味方した我らの敵ではない！！」

「突撃、粉碎、勝利なのだ！！」

『オオオオオオオオオオオオ！！』

雄叫びを上げながら、砦門へと突撃して行った。

「愛紗ちゃん、鈴々ちゃん…」

桃香は不安そうに見つめる。

「大丈夫だよ、桃香」

一刀は桃香の肩に手を置く。

「でも…」

「大丈夫。信じていよう、ね？」

「うん」

(目の前でいちゃつかれる事ほど不愉快な物は無いわね…)

多少の嫉妬を抱きながら、戦場に目を向ける。

「そろそろね。合図の銅鑼を！」

「はっ！」

『ジャーン ジャーン ジャーン』

けたたましい音が響く。

味方の軍が、撤退しようとして攻撃の手を止めた。

すると砦の門が開いた。

「えっ？」

突然の事に間抜けな声を上げるレミリア。

「まさか……出撃の合図と間違えた？」

隣の一刀も苦笑いを浮かべながら言う。

「阿呆ね…。どうしようもない阿呆だわ」

深くため息をつきながら、ポケットからカードを出す。

「神槍『スピア・ザ・グングニル』」

カードが紅い槍に変化し、出現する。

「行ってくるわ。しっかり守ってあげなさい、一刀」

「おう。気を付けてな」

「フッ」

鼻で小さく嗤うと、前線に向かって駆け出した。

（今度は興奮し過ぎないようにしなきゃ…）

眼前に下がって来る自軍が見える。

「二人は！」

「殿です！」

味方を掻き分け、殿部分まで前進する。

（まだ訓練が今一ね…）

自軍の錬度の低さを知り、内心で溜息をつく。

「愛紗！ 鈴々！」

「お嬢様、こちらです！」

「こつちなのだ！！」

目の前に迫る敵を倒しつつ、獲物を掲げる。

「よく耐えたわ」

そう言つて殿の最前線に立つ。

「さあ行くわよ！ 全軍転換！ 三人一組で敵一人に当たれ！！」

そうすれば必ず勝てる！ 命を惜しむな、名を惜しめ！！ いくぞ、全軍突撃イイ！！」

『オオオオオオオオオオオオオオ！！』

「よし、我々も遅れを取るな！ 白馬義従の名を奴等に思い知らせてやれ！」

『オオオオオオオオオオオオオオ！！』

両軍共に雄叫びを上げて、突撃し、ぶつかる。

首が飛び、腕が飛び、武器が飛ぶ。

血飛沫が上がり、雄叫びと断末魔が上がる。

黄巾の軍は、たまらず砦内に逃げようとする。

「は、早く門を閉める!!」

将らしき男が、門番にそう叫ぶ。

「ですがまだ外に仲間が!」

「ええい、そんな者に構ってられるか!!」

「わ、分かりました!」

門がゆっくりと締まりだした。

「お嬢様、門が!」

「分かっている!! お前達は包囲の準備をしている!!」

そう叫び、グングニルを掲げ、大神オーディンの如く、投げる。

「お、お嬢様!?!」

戦場で武器を投げる事は、自ら死を招くのと同じ。

通常の武器ならば…。

「ぐんぎん!!」

門を閉めていた兵に命中した。

「な!?! あの距離で当てただと!?!」

指示を出していた将は驚愕し、他の兵も呆気にとられ手を一時止める。

「好機!?!」

レミリアは全力で走った。

「はっ! 何をしているか!?! は、早く閉じろ!?!」

我に返り、再び指示を出す。

だが吸血鬼の身体能力の方が勝った。

「な!?!」

人街の能力を見せられ、たじろぐ。

「死ね!」

死体が刺さったままのグングニルを将に向かって投げる。

「ぎゃあ!」

寸分の狂いなく、頭を打ち抜く。

「敵将討ち取ったあ!?!」

「か、頭がやられたあ!?!」

「に、逃げるお!!」

「馬鹿、何処に逃げんだよ!!」

砦内に閉じ込められた賊たちは、逃げようと必死に右往左往する。

だが逃げるための脱出口は、レミアの後ろにしか存在しない。

たとえ逃げ出せても、その後ろには義勇軍と公孫？軍が包囲している。

逃げ切れるものではない。

「聞け、賊軍どもよ！我が名はレミア・スカーレット！今武器を置けば命だけは助けてやる！だが、まだ抵抗するのなら一人残らず鬺り殺す!!」

「スカーレットオ!? つーことはお前があのスカーレット・デビル紅い悪魔!？」

「そうだ！貴様等もあの5000の同胞たちと同じ末路を辿りたく無くば、武器を捨てろ」

有無を言わせぬプレッシャーと殺気を当てられた賊軍に逆らう気力などなく、全員が大人しく武器を置いた。

「よろしい！さあ付いてきなさい!!」

こうして義勇軍の勝利でこの戦いは終わった。

Side:???

「信じられないわ……」

「全くです」

公孫？軍から救援の文が来て、来てみればもう戦は終わって居た。

「どうやって砦を落としたというの……？ 援軍が加わったとてこうも早く勝つなんてありえないわ……」

顎に手を当て悩む桂花^{けいふあ}。

「取り敢えず会ってみましょう。この近くで噂になっている天の御遣いと紅い悪魔が見れるかもしれないし」

「あの噂の……ですか」

「ええそうよ。さあ行くわよ」

スカーレット・デビル
紅い悪魔……。

是が非でも欲しいわ！

Side out

「報告！ 此方に近づく軍団を発見！ 牙門旗は“曹”・“夏”！」

「曹操か…。なんか悪いことしたなあ」

公孫？は、ばつが悪そうに頭をかく。

「来てしまったモノは仕方ないわ。軽く挨拶でもすれば良いじゃない」

「うゝむ…」

「そう言えば、スカレット殿。折角ですし、私と手合わせ願えませぬか？」

不敵に微笑む趙雲。

「何故？」

対して然も面倒そうに睨むレミリア。

「貴公に興味があるからです」

「そう…。だが断る」

「何故です？」

「私は今とても眠たいのよ」

「そこを何とか」

「どうしてもと、いうのなら私の下へ来なさい。それだったら飽きるほど相手してあげるわよ?」

「うゝむ…。魅力的な提案ですが、まだ世界を見てみたいので今はお断りしておきます」

「そう。残念ね」

「レミリアという者は居るか!?! 私と一緒に来て貰おう!?!」

バカっぽそうな声が響く。

「何だ貴様は!」

その対応しているのは愛紗。

「貴様とは何だ! 貴様がレミリアか?」

「答える義務は無いな。それに失礼な輩だな。礼儀というのを知らぬのか貴様は? どの馬の骨だ」

「何だと!?!」

愛紗の挑発に乗せられて、少女は大剣を抜いた。

「お止めなさい愛紗。そんなバカの相手をしてしていると貴女にまでバ

力が移るわよ？」

「何だと！！ 人が下手に出ていけばいい気になりおって！！」

「あら、今までの対話の中で貴女が、何時下手に出たのかしら？
それとも会話の仕方一つも知らない様な馬鹿なのかしら？」

「なんだとおおお！！」

そう言つて大振りで大剣を振り下ろす。

「あらあら、とんだ猪ね？ 脳筋というべきかしら？」

「数々の侮辱の言葉…許さん！！ そこに直れ！！ そのそつ頸叩
き落としてやる！！」

「殺れるものなら殺つてみなさい」

小馬鹿にしたように指で挑発をする。

「おのれえええ！！」

先程よりも速く重く大剣を振り回す。

「なあにその剣捌きは？ 止まって見えるわ」

「くっ！ よけるな、臆病者！」

「何ですって？」

レミリアの眉間に皺が寄る。

しめたと言わんばかりに笑む少女。

「臆病者と言ったんだ、臆病者と！ どうせ私の剣を受けるだけの技量も度胸も無いのだろう？ この臆病者……！」

「この私が臆病者だと……！ ……良いでしょう。そこまで言うなら受けて立とうじゃない！ 関羽……！」

「はい！」

「審判をなさい。殺してしまわぬ様に止めて頂戴。神槍『スピア・ザ・グングニル』」

カードが紅い槍へと変化する。

「初め！」

先に動いたのは少女。

「はああああ……！」

上段からの振り下ろし、そして切り上げ。

難なく紙一重で交わす。

「単調過ぎて話にならないわね」

一旦距離を置いて、目を閉じ深呼吸をする。

「覚悟なさい！ 一撃で仕留めてくれる！！」

急激にレミリアの殺気が膨れ上がる

その殺気に押され、少女はほんの一瞬、瞬きをした。

目の前にスカーレット・デビル紅い悪魔が居た。

「っ！！」

グングニルはもう振るわれている。

とび引く余裕も、脚力も無い。

少女は咄嗟に大剣で、右から迫る紅い槍を防ぐ。

「がはあ！」

防御も空しく、大剣は砕け散った。

迫る紅い槍。

少女は死を覚悟した。

「止「そこまでよ！！」「」

愛紗の制止の声よりも先に、鋭い声が響く。

「…命拾いしたわね」

グングニルの矛先が、寸での所で止まっている。
槍をカードに戻し、ポケットにしまう。

「部下が失礼を働き申し訳ない」

「ええ。躰が行き届いて居ない様ね、曹孟徳？」

「……何故私の姓と字を？」

「私の知識よ。なんなら名も言い当てましょうか？」

「…結構よ。それより貴女は？」

「私だけ言い当てるのも不公平だから、今度は貴女の番よ。当てて御覧なさい」

「貴様あ！ 華琳様に向かってなんて態度を！！」

「黙りなさい、春蘭」

「…華琳様あ」

黙れと言われて頂垂れる少女。

「…レミリア・スカーレット。そして紅い悪魔^{スカーレット・デビル}。どっかしらっ？」

「ご存知とは光荣だわ。…それで何の用かしら？」

「単刀直入で言うわ。私のものになりなさい、レミリア」

「断る」

「どうして？」

「既に守ってやると誓ったからよ」

ちらりと桃香達を見る。

「所詮は口約束でしょう？ そんな誓い捨ててしまいなさいよ」

「悪魔と言うのは義理堅いのよ。一度結んだ誓いは何があっても守らなくてはいけないの」

「余計欲しくなったわ。悪魔？ ふふ、上等よ。誓いを結んだ貴女の主人も雇用するわ」

「それは劉備に言っただ頂戴」

「だそうよ？ どうかしら？」

曹操はレミリアの後ろで控えていた劉備に振る。

「ふえ！？ わ、私は……。お、お断りします……」

(だってなんか怖いんだもん！！ それに夢も諦められないし……)

「だ、そうよ。お引き取り願えるかしら？」

「そう…ならば…」

近くの少女達に目配せをする。

「劉備を殺して奪い取るわ！ 秋蘭、季衣、流琉！」

『はっ！』

秋蘭は矢を番え、季衣は鉄球を構え、流琉は巨大なヨーヨーを構える。

「でえい！」

「はっ！」

季衣と流琉は同時に獲物を放つ。

「冗談じゃないわ」

飛んでくる鉄球とヨーヨーを両手で受け止める。

「「なっ！？」」「

「いい加減にして貰えるかしら？ 私は眠いのよ」

そう言って鎖と紐を振り回して放り投げる。

「うわぁー！」

「ぎゃー！」

「私の自慢は、早寝早起き…。大きくなりたかったら真似しなさい」

「うわぁ…。参考にやらねえ…」

「何ですって一刀!？」

「しまった、声に出てた!」

「ご主人様…緊張感無さ過ぎです…」

一刀の緊張感の無さに愛紗があきれる。

「……頑固ねえ」

曹操は満足そうにニヤニヤと笑っている。

「貴女の我儘ぶりよりはマシよ」

「…まあいいわ。しばらくの間は泳がしておいてあげる。でもその内国ごと貴女を頂くわ。…もともと貴女の体は、荒縄と鞭と蠟燭の跡がびっしりついているでしょうけどね」

そう言って妖しく笑む曹操。

「良い性癖しょうせきね、曹孟徳」

「ふふ、気が合いそうで何より。さあ引き上げるわよー」

『…』

「あ、そうそう、一つ言い忘れて居たわ」

そう言っただち止まる。

「私がこの乱を鎮めて見せるわ。それが私から貴女達への挑戦状よ。精々強く成りなさい」

そう言っただち曹操達は陣営内から去って行った。

「全く何だったのかしら？」

(咲夜もそうだったけれど、完璧人間ほどどこか異常をきたしているモノなのかしら?)

そう思いながらため息をつく。

「災難だったなレミリア」

「ええ。…後でO・H・A・N・A・S・H・Iしましょうか一刀」

「ごめんなさい！ マジで勘弁して下さい!!」

ジャンピング土下座をする一刀。

(Dr・ワリーかっこの…)

某ゲームに出てくる悪の科学者を思い出しながら、一刀の後頭部をぐりぐりと踏みつける

「イダダダ!! ごめんなさい! マジで勘弁して下さい!! 頭潰れるって!!」

(ああ、なんか気持ちよく…って違う!!)

一刀は何かに芽生えそうに成りつつもそれを全否定して許しを請う。

「まあ、良いわ。以降発言に気をつけなさい」

「はい…」

地面に頭を付けたまま力無く返事をする一刀。

「何時までも地に這い蹲って無いで行くわよ!」

一刀をそのままにして天幕の中へと入って行った。

その夜、一刀は今日の日記欄に

(今日の教訓:レミリアは怒らせると二つの意味で恐ろしい…)

と書き込みましたとさ。

第四話 曹操襲来（後書き）

如何だったでしょうか？
ちよつと最後のメ方が今一でしたかね？

なんか話を増すごとに愛紗と険悪になつて行くレミアア。
当初の予定では違つたんですけどねえ（・|・；）
そして残念な一刀君と空気化した公孫？さんと趙雲さん。
多分次回位に出番がある…ハズ。

さて、
改善点などがありましたら、一言の方に記入お願いいたします。
この作品を読んで戴いた方々と感想を書いていただいた方々、評価
して下さった方々、皆様に感謝！

（P S）

アンケートの期限は、10月16日とさせて頂いていただきます。
何かありましたら、感想の一言までよろしく願いたします。

10月14日アンケート途中結果

作者の案件通り：1

咲夜さん：1

美鈴さん：1

第四・五話 拠点 part (前書き)

おはようございます・こんにちは・こんばんは・初めましての方は初めまして。

第四・五話です。

遅くなりました。

ネタが中々出無くて難産でした。

今回の話は、感想にあった「おぜう様の羽根」と「一刀の吸血鬼化」
+ についてです。

では拠点 part をお楽しみください

第四・五話 拠点 part

「ていやああああ!!」

「ほら! また重心がずれてるわよ!!」

今日も城の中庭でレミリアの容赦ない扱きが行われている。

「うりやりやりやりや!!」

「矛捌きが単純すぎ! もっと虚実を付けなさい!!」

鈴々の連撃を難なくかわし、足を引つ掛ける。

「にゃ!?!」

バランスを崩し、転倒する。

そして追撃に出るレミリア。

が、片手で地面を転がりながら蛇矛を振り、追撃を阻止する。

「くっ! やるように成ったじゃない」

「何時までも同じじゃられ方はしないのだ!!」

距離が離れた隙に素早く立ち上がる。

「せいやああああ!!」

矛を前に突き出して突撃を駆ける。

「またその攻撃？ 見飽きたわ」

溜息を吐きつつ、グングニルで矛先を弾こうと薙ぎ払う。

「掛ったな、なのだ！」

「な!？」

待ってましたと言わんばかりに、薙ぎ払われた勢いを利用して矛を振う。

「くっ！」

(間に合わん！)

グングニルを引き戻さず手放し、両腕をクロスさせてガードする。

「ガハアア!!」

ガードも空しく吹き飛ばされ、調練場の壁に叩き付けられた。

「にゃ!？ だ、大丈夫なのか!？」

まさかすんなり入るとは思わず、急いで駆け寄る鈴々。

「ぐぐ、じぶ……。な、なんとか…ね」

「大丈夫じゃないのだ!! 今すぐ治療を…」

「大丈夫よ…。たかが腕二本と肋数本^{うはすぢ}…。一刻も経てば治るわ」

「にゃ？ そーなのかー？」

「…ええ、大丈夫よ。それよりもあの一撃、中々良かったわ。油断していたとはいえ私に一撃入れられたのだから」

「にゃははは 次も入れられるように工夫してみるのだ！」

「精進なさい。でも二度目は無いわ」

薄く笑むとゆっくりと立ち上がる。

「にゃ、ちょっと待つのだ！」

「何？」

「約束を果たして貰うのだ！」

レミリアは前回の調練の後、『もし自分に一本決めれたら願いを一つだけ聞く』という約束をしていた。

「ああ、そうだったわね。何がお望み？」

「それが欲しいのだ！」

「え…これ？」

鈴々が指さしたのは…レミリアの羽根だった。

「すごくカッコいいのだ！ だから鈴々、その羽根が欲しいのだ！」

「残念だけどこの羽根は飾り物じゃないの。私に直接生えている物なの」

「うう、そうなのかー」

「ええ。ほら」

そう言っつて服を脱いで背中を見せる。

「おー！ ホントに生えてるのだー！」

「その代わりに、肉まんか拉麺を奢ってあげるわ。だから諦めて頂戴」

「分かったのだ！ じゃあ怪我が治ったらすぐ行くのだ！」

「はいはい」

レミリアは苦笑いを浮かべて、壁にもたれ掛った。

だがこの後、彼女を戦慄させる恐ろしい事が起るうとは知りもしなかった。

〈街〉

二人は街の一角の拉麺屋で食事をしていた。

その周りには多くの人ばかりが…。

「おっちゃん！ 超大盛りチャーシュー麺と巨大餃子おかわり！」

「へいよ！ 將軍様ジャンジャン食べて行って下さいね！」

「ちょ、貴女まだ食べるの!?!」

カウンターの上には大きなラーメン丼と餃子の大きな皿が多く積み重ねられ、鈴々は25杯目の拉麺と5皿目の餃子を注文していた。

レミアはその底なしの食欲に引き気味で、財布の中身を確認していた。

（まさかこんなに食べるなんて!! お金足りるかしら…）

「へいよ、お待ち!!」

「わーい」

カウンターに拉麺と餃子が置かれる。

「いただきまーすなのだ！」

そしてあっという間に減っていく。

「…まだ食べる?」

「いや、今日はこれで最後なのだ！」

「そ、そう。店主、お代はいくら？」

「へい！　これがお代です」

差しだされた紙の束を受け取って、顔の笑みが更に引き曇る。

（……！　ちょ、ま！　嘘でしょ！？　財布がスツカラカンになっちゃうじゃない……！）

そこに書かれていた金額と、レミリアの中にある金額はほぼ同額だった。

（食事代だけで、小さな屋敷が建つわ……）

「あの……太守様？」

「……何でもないわ。はい……お代……」

（私のお小遣いが……）

「へい！　毎度ありー！」

「ありがとーなのだ！」

放心状態のレミリアの耳には鈴々の感謝の言葉も入らない。

（……腹いせに一刀の血をいつもの倍吸ってやる……！）

そう心に決めて、城へと足早に帰って行った。

「一刀の執務室」

「一刀！ 吸血の時間よ！！」

ボタンと勢い良く扉を開け、ズカズカと一刀に歩み寄る。

「…あの〜何で不機嫌なんですか？」

「貴方が知る必要はない！ さっさと首筋を差し出しなさい！ 早くしないと…腕を？^もいで蛇口を付けて直接飲むわよ！！」

「それは勘弁！！」

慌てて上着を脱いで、首筋を差し出す一刀。

「最初から素早くそうしてればいいのよ」

（何と言つ理不尽！ でも…）

「何顔を赤らめてるのよ、気持ち悪い…」

「ぐはあ！ その一言は流石に傷つく…」

「あ〜もう！ 黙ってしゃがみなさい！」

「うお!？」

一刀の肩に手を置いて、力を込めてしゃがませる。

「では、いただきます」

両手を合わせ拜んで、首筋に咬みつく。

牙が血管を貫通し血が溢れ出てくる。

「痛っ！ ちょ、いつもの三割増しで痛いんですけどー!」

「んく…んく…」

一刀の苦情を一切無視していつもの倍の量、吸血する。

「んく…んく………おえ」

「え？ いまおえって…ギャー!」

脂っこい食べ物を大量摂取すると気持ち悪くなるのと同じで、彼女の場合も同じだった。

少々脂っこい血をいつもの倍吸ったため、吐いてしまったのだった。

吐いたと言っても、血液以外摂取しないので胃液と血液しか出ないが、一刀の背中から腹のあたりにかけて酸性の血液がぶちまけられた。

「…ごめんなさい。吐いちゃった」

「いや別にいいけど…次から気を付けてね…」

(これは我々の業界でもキツイかも…)

「私も服汚れちゃった」

「…洗いに行こうか」

レミリアと一刀は執務室を出て、森を抜けて小川へとやって来た。

「……………」

小川で二人とも黙って服を洗い続ける。

一刀は上半身裸で、レミリアはドローズだけという姿。

事情を知らない人間が見たら、間違いなく一刀は通報されるだろう。

「あのさ…一つ聞きたい事が有ったんだけどさ」

「何？」

沈黙に耐えきれなくなったのか、一刀が徐に口を開く。

「俺って吸血鬼になるのかな？」

「…はあ？」

「いや、だから俺って吸血鬼になるのかなーって」

「さあ？ でも今の所何の変化も無いのだからならないんじゃない？」

「…そっか」

また黙って、服を洗う。

「…こんなもんかな？ さあ戻ろっか」

「ええ、そっね。…さっきは本当にごめんなさい」

「別に良いつて」

その後、彼らは愛紗に怒られた。

S i d e : レミリア

黄巾党を撃退した時に拾った二人の少女は臥竜鳳雛だった。

何と言う幸運だろう。

これで彼女達を軍師にし、問題だった兵達の指揮と人材不足が解消される。

桃香も一刀も賛成の様だ。

意外な事に愛紗も賛成の様だ。

真名は、諸葛亮を朱里といい、鳳統を雛里と言った。

噛み噛みだが大丈夫だろうか？

私は不安に思ったが、取り敢えず様子見という事で一刀の補佐に任命した。

彼女らの働きに期待しよう。

第四・五話 拠点 part (後書き)

如何だったでしょうか？

次回以降から臥竜鳳雛の出番も出てきます。

さて、

改善点などがありましたら、一言の方に記入お願いいたします。

この作品を読んで戴いた方々と感想を書いていただいた方々、評価して下さった方々、お気に入り登録して下さい方々、皆様に感謝！

アンケートにご協力いただきありがとうございます。

アンケートの結果により、東方系キャラの登場は終盤に成りそうです。

白玉蓮華さんすいません。

また何か、ご要望があればアンケート形式にしていきますので、何かあれば感想の一言欄か、活動報告のコメントにお願いいたします。

ではまた次回に。

PS

ただいま、ちょっと現実リアルが忙しくて作品が書けて居ません。
なので次話はもう少しお待ちください。

楽しみにしている方々、本当に申し訳ありません。 / 十一月二十三
日

第四・五話EX

幻想郷にて（前書き）

大変遅れました。
本当にすいません。

第四・五話EX 幻想郷にて

幻想郷 マヨヒガ

「紫様、ただ今戻りました」

「藍、何か分かった？」

「はい、鴉天狗の念写に写っていました。これです」

そう言っつて尻尾の中か封筒を取り出す。

「これは…？」

その写真には、白髪の導師の服を着た少年と、真っ黒な人型をした物体が写っていた。

「これを連続で捲ると…」

そう言っつて、パラパラ漫画の要領で写真の束を妖力で捲っていく。

「…、これは…！」

写真の中の物体が溶けて、あっという間に紫の姿になる。

「これが今回の異変の首謀者と協力者です」

「…こんな妖怪、招待れたかしら？」

自分と同じ姿をした物体をいつ入れたか考える。

「いえ、この者がこの二人を手引きしたと思われます」

そう言つて、もう一枚の写真を出す。

写真には眼鏡を掛けた男が写っていた。

「この男が？」

「はい。この者の名は于吉、そして先程の少年は左慈。外史の管理者です」

「管理者？」

「はい。多数の外史を管理している者で、外から結界をすり抜けてこの妖怪と侵入。そして紫様の姿になったのは、この妖怪の能力と思われまます。この妖怪は変化した対象者の能力を複製すると思われまます」

「成る程ね」

「目的は恐らく……」

「幻想郷の消滅かしら」

「そんなことになれば、世界の妖怪と人間のパワーバランスが崩れる事となるのに……。どうしてでしょう？」

「さあ？」

「ゆ、紫様あ…」

主の素っ気ない返事に脱力する藍。

「でも、いい度胸ね」

「ゆ、紫様？」

紫は、そう言っただけで立ち上がる。

「このスキマ妖怪に…幻想郷に喧嘩を売ったことを後悔させてやるわ…!」

その顔は鬼の形相よりも恐ろしいモノだった。

「今すぐ、閻魔達に連絡を。この妖怪を調べなければならぬし」

「はっ!」

藍は葉っぱを残して消えた。

数刻後

マヨヒガには四季達が集まっていた。

「犯人が分かったとは本当ですか？」

「ええ、藍。先程の写真を」

「はっ」

写真を妖力でパラパラと捲っていく。

「これが今回の異変の首謀者と協力者で、この者がこの二人を手引きしたと思われます」

そう言つて、先程の写真を出す。

「こんな小わっぱ共がか？」

「この者の名は于吉、そして先程の少年は左慈。外史の管理者です」

「管理者？ 何だそれは？」

「多数の外史を管理している者です。それで外から結界をすり抜けてこの妖怪と共に侵入。そして紫様の姿になったのは、この妖怪の能力と思われ、この妖怪は変化した対象者の能力を複製すると思われま

「成る程……。しかしこんな妖怪、見たことも聞いたこともないな」

大天狗は顎を撫でながら紫に化けた妖怪を見る。

「しかし、化けた相手の能力丸写しですか…。厄介な相手です」

「でも何でこんな回りくどいやり方をするのでしょうか？」

大天狗の後ろに控えていた射命丸文がそう呟いた。

「確かにな。態々（わざわざ）八雲殿に化けておきながら、妖怪を拉致するだけとは…。しかも比較的狂暴な奴ばかりを」

「奴等の目的が幻想郷の消滅ならば、私の能力を使えば簡単。でもしなかったと言うことは、別の目的があるのかしら？」

「…スカーレット嬢の暗殺か？」

「だとするのなら妖怪を拉致する必要はないはず…」

その一言で全員が黙りこくった。

「…もしかして間接的に滅ぼす気じゃないでしょうか」
沈黙を破ったのは文だった。

「間接的？」

「それはどういう意味ですか？」

一同は首を傾げ、文を見た。

「管理者と仰いましたよね？ だとしたらこの者達は何か偉い役職の人間じゃないかって思いました。直接的に行動しないのは、自分達に責任等が来ないようにするためとも考えられます」

「権限を利用して紫様に責任を押し付けて、幻想郷の消滅又は紫様の抹殺を図ったと？」

「多分…」

「取り敢えず彼等は私達に敵意が有り、害を及ぼそうとしているのです。つまり彼等は黒。我々には非はありません」

映姫はきっぱりと言ったのけた。

「しかしまだ干渉は出来ない。何とも歯痒いな」

「しかし何より問題なのは、この妖怪(?)ですね」

「森近殿なら知っておるのではないか？ 外界の本を多く持っているんだ。何か知っているやもしれん」

「藍、悪いけど連れて来てくれるかしら？」

「はい、畏まりました」

そう言ってまた葉っぱだけ残して消えた。

…」

「不老不死まで複製できるのでしょうか？」

「それは分からない。でも能力までコピーするみたいだから…もしかしたら、ね」

「そう、困ったわね…」

やれやれといった感じで思考に耽る紫。

「ん？ この写真の男ってもしかして于吉かい？」

霖之助は、机の上に置いてあった一枚の写真を手を取った。

「何故知ってるんだ？ 知り合いなのか？」

「知り合いも何も、香霖堂ウチの常連さんだよ」

『なんだって！？』

霖之助の一言に体を前のめりにする一同。

「知り合いとはどういう事だ、森近殿？ まさか貴殿もグルではあるまいな！？」

「霖之助、もしかして貴方が彼等を幻想郷なかに入れたんですか？ 正直に言えば極刑にだけはしませんよ？」

大天狗は団扇うちわを構え、映姫は手鏡を霖之助に突き出す。

「ちょ、ちょっと待って下さいよ！ 計画の事なんて知りませんよ！ ホントに只のお客さんですよ。特にヤバイ買い物する訳でもなく世間話をする程度の仲ですよ」

疑われた霖之助は、慌てて誤解を解こうとする。

「…鏡に反応がありませんね。どうやら本当のようです」

「そうか。ふむ、森近殿疑ってすまなかった」

大天狗は団扇をしまい、頭を下げた。

「いや、分かって頂ければいいんです。で、もう帰っても良いですかね？」

「？ どうかしたの？」

「いえ、あのその、空気に耐えられないので…」

後頭部を掻きながら、苦笑いを浮かべる霖之助。

「まあ、そうね。ドッペルゲンガーの話も聞いた事ですし、帰っても良いわよ。藍、霖之助を香霖堂まで送ってあげて」

「はい。では行きましょう」

「よろしく」

再度、葉っぱだけ残し消えた。

「しかし、どうする？ 此方からは下手に手出しできません。五大老も妖怪も外史むいしに送れぬ。これではレミリア嬢に報告が出来ん」

「そうねえ…。妖精では力不足。かと言って霊夢達だと、外史の許容範囲を超えてしまう…」

「これ以上パワーバランスを崩す訳にはいきません。となると…」

「大天狗様、椛もみじでは駄目でしょうか？」

「いや駄目だ。椛も妖怪だ。パワーバランスを崩す事になってしま
う」

「困ったわねえ…」

外史には許容範囲と言うものがあり、その基準を守っている限り外史は存在する事が出来る。

今、レミリアが居るその外史は許容範囲ぎりぎりなのである。

許容範囲の条件を満たす妖怪（”犬走椛”いぬはしりもみじや”河城にとり”かわしろ等）を送るうにも、幻想郷内のパワーバランスは今回の一軒で崩壊寸前で、不可能となっている。

そのため八方ふさがりとなり、全員が黙りこくってしまふ。

「…紫様、橙たちえんでは駄目でしょうか？」

何時の間にか戻って来ていた藍が、おずおずと提案する。

「…藍、貴女本気で言っているの？ 確かに橙ならば許容範囲を超える事も無いし、パワーバランスを崩す恐れも無い。けれどまだ半人前よ？ 碌に自衛手段さえ無いあの子が、あんな厳しい所に行つて生き残れると思つて？」

紫は鋭い視線を藍に向ける。

「…確かに橙はまだ半人前です。ですが、獅子は我が子を千尋の谷へ突き落とします。この機会に実戦を経験するのも式として一人前になるために必要な事ではないでしょうか？」

藍は臆することなく、紫の目を見据えて言った。

「…超が沢山付く程過保護な貴女からそんな言葉が聞けるとはね。分かったわ、橙を送りましょう。皆もそれでよろしいかしら？」

「打つ手がない以上、それしか無いでしょうな」

「問題無いでしょう。では私は地獄の管理が有るのでこれで…」

一礼して帰ろうとした映姫の眼前に、涎を垂らして居眠りしている小町の姿が…。

「小町！ また貴女は居眠りして！…！」

「きゃん！」

怒った映姫に悔悟棒かいごぼうで叩かれた小町は、可愛らしい声を上げて叩かれた箇所を押さえる。

「幻想郷の危機だというのに貴女と言う人は!!」

「ま、まあまあ落ち着いて下さいよ映姫様。そんなに怒ると怒り皺が出来ちゃいますよ？ スマイルスマイル……」

「こゝまゝちゝ!!」

(逆効果だった!!)

映姫は小町の襟首を掴むと、速足で歩き始めた。

「痛い痛い痛い!! 映姫様、擦れてますって!!」

映姫は、小町の悲痛な訴えを無視して引き摺って帰って行った。

「…ふむ、では帰るぞ文」

「はい、大天狗様」

大天狗達もそくささと帰って行った。

「藍、橙の事は全て貴女に任せるわ」

「はい!!」

藍は大きく肯いて、出て行った。

第四・五話EX 幻想郷にて（後書き）

如何だったでしょうか？

ちよつと路線変更が有りまして、急遽『橙』が参戦となりました。
これは矛盾点を無くす為です。

ご了承ください。（主役はレミリア固定です）

改善点などがありましたら、一言の方に記入お願いいたします。
この作品を読んで戴いた方々と感想を書いていただいた方々、評価
して下さった方々、お気に入り登録して下さった方々、皆様に感謝
！

第五話 袁紹からの文（前書き）

おはようございます・こんにちは・こんばんは・初めましての方は初めまして。

昨今、身の回りが慌ただしく、また遅くなってしまう、真に申し訳ありません。

第五話 袁紹からの文

まだ朝も早い時間から、玉座ではレミリア達が卓を囲んで軍議をしていた。

議題は袁紹から届いた一通の文だった。

それに目を通していたレミリアは、その文をおもむろに放り投げた。

「ちよ、レミリア!？」

「くだらないの一言に尽きるわ。何が『幼帝や民の為に立ち上がりましょう』よ。ただの嫉妬じゃないの」

苛立たしげに、腕を組んで椅子に座る。

突然の出来事に驚くも、一刀が文を拾い目を通す。

文には、『都で靈帝が死亡した事』と『董卓が十常侍を殺して都の実権を握り、悪政を引いているという事』そして、『それを打倒すべく各諸侯に召集を掛けているので反董卓連合に参加せよ』といった事が書かれていた。

「? 暴君を倒して民を救おうっていうって書いてあるだけじゃないか。これの何処が嫉妬なんだ?」

「そうですね、お嬢様! 袁紹さんは洛陽の苦しんでいる人たちの為に立ち上がったんですよ? 嫉妬なんて何処に…!」

(国の2トップがこんなお人好しで大丈夫なのかしら…)

二人のお人好しさに呆れつつ、ため息交じりに説明をする。

「いいこと？ よく聞きなさい。先ず最初に、今回召集を掛けているのは誰？ 雛里」

「ほう！ え、袁紹さんでしゅ…」

突然指名された雛里は噛みつつも答えた。

「そう、袁紹なのよ。袁紹と言えば名家の出身なの。それもかなりの…。…これでもまだ分からない？」

頬杖を突きながら、自国の重鎮達を見渡す。

將軍勢は頭に？を浮かべて困惑し、国の2トップも？を浮かべている。

「あ！」「」

そんな中二人の新任軍師が同時に声を上げる。

「分かったかしら？」

「はい。でもしかし…」

「朱里、雛里、一体何が分かったのだ？」

いまだにピンとこない愛紗が朱里に問う。

「董卓さんは今でこそ洛陽で悪政を引く事が出来るほどの権力を持つていますが、元は名家とは言い難いんです」

「それで自分より家柄の低い人間に、都で好き勝手にでかい顔されたくないってわけか…」

「はい。でも普通に宣戦布告したのでは、下心がばれてしまいます。だから噂を利用もしくははねつ造して、大義名分としたんだと思われ
ます。でも…」

雛里はそこまで言うと帽子を目深にかぶった。

「確証がない。そう言いたいんでしょう?」

「はい、その通りです」

「ふっ…。まあ、どちらにせよそんな事はどうでもいいのよ。嘘であるつと真であるつとね」

レミリアは不敵に笑んでさらに続ける。

「取り敢えず勝てばいいのよ、勝てば。乱世において弱者は衰退し、
勝者のみが生き残る。董卓には悪いけれど私達の踏み台になって貰
うわ」

「た、確かにそうだけど…」

「そ・れ・で? どうするの? 噂を信じて参加する? それとも
見ているだけで終わる? 私としては前者だけれども」

「私は参加します！ もし噂通りならば、苦しむ民草を放っている訳にはいきません！」

「鈴々も参加するのだ！ もし本当に悪い奴だったらやつつけて、良い奴だったら匿うのだ！」

『我らの意思はお嬢様と共に』

「私も賛成です…。ここらで一回もつと大きく名を売らなければなりませんし、それに敵将を籠絡させる事が出来れば兵力増強にもなります」

「私も同意見です」

將軍・軍師共々賛成の様で、張り切っている。

「桃香、一刀。貴方達はどつするの？」

今だ難しい顔を居ている一刀と暗い顔をしている桃香に問う。

「私は…あまり賛成できません…」

「俺も」

『な!?!?』

「…理由を聞かせて貰えるかしら?」

(理由は大方見当が付いているけれどね)

「確かに噂通りなら、苦しんでいる人たちを救ってあげたいです。でも、もし違ったら…！ 違ったら…罪のない人たちを、私達が逆に苦しめてしまう…。そう思うと決断できないんです…」

「そう、ならば諦めなさい。戦争とはそういうものよ。嘘であれば当であれ、苦しむのは民達。戦争で一番の皺寄せが来るのは領民達。それが現実よ」

「そんな…」

「…義勇軍を立ち上げる時、言ったわよね？ 王の責務は、『全ての責任を負い、全ての悪評を負い、民の為、部下の為、如何なるの罪を被り、民を飢えさせず、才を埋もれさせぬ事。なにより現実から逃げ出さない事』だと」

「はい」

「それが今よ。洛陽の民や兵から恨まれようと、それを背負いなさい。背負い切れずに押し潰されそうなら言いなさい。代わりに私達が支えてあげる。そのために私達がいるのだから。だから絶対現実から逃げ出さない事。良いわね？」

「は、はい…！」

袖で涙を拭って、何時もの笑顔を見せる。

「一刀も良いかしら？」

「おう。でも、もし嘘だった時は董卓は如何するんだ？ 他の諸侯

に捕まったら絶対処刑されちゃうけど…」

「洛陽に攻め入る時に、何としてでも先鋒の役を貰って見つけ出すしかないわね」

「そんなに上手く行くかな？」

「さあ？ その時にならないと分からないわ」

「先の事ばかり考えていても仕方ない、か」

「ええ、その時に知恵を絞れば良い。では二刻後に、兵を集めて連合の陣と合流する。各員、早急に準備せよ！」

『応（なのだ）！』

全員が、慌ただしく玉座から出て行って、準備を始めた。

第五話 袁紹からの文（後書き）

如何だったでしょうか？

また近々テストがあつて早めに投稿できないかもしれません。
本当にすいません。

さて、

改善点などがありましたら、一言の方に記入お願いいたします。

この作品を読んで戴いた方々と感想を書いていただいた方々、評価して下さった方々、お気に入り登録して下さいました方々、皆様に感謝！

アンケート結果

1．仲間にする

アンケートの結果は以下の通りです。

1．2票

2．0票

3．0票

ご協力ありがとうございました！

第六話 おぜう様の悪戯(前書き)

おはようございます・こんにちは・こんばんは・初めましての方は初めまして。

第六話です。

大変お待たせしてしまって申し訳ありません。

第六話 おぜう様の悪戯

青空が続く荒野の先に諸侯の牙門旗が翻り、諸侯ごとに陣営を建てている。

レミアア達の軍勢は連合軍の最後尾に陣営を建て、兵士達を休めていた。

「袁・公・孫・曹・馬……。そうそうたる顔触れね」

「こうして集まると圧巻ですな」

「いつかは敵対する者たちよ。しっかりと戦いを見ておきなさい」

『はっ！』

「休憩中失礼します！」

金色の甲冑を纏った兵士が、駆けつけた。

「何かしら？」

「軍議を行いますのでお集まり下さい！」

「分かったわ。すぐ向かうと言っておいてちょうだい。御苦労さま」

「はっ！ 失礼いたします」

兵は一礼し、走り去った。

「聞いた通りよ。朱里と桃香は私についてきなさい。他の者は待機せよ」

『はっ！』

(さて、鬼が出るか蛇が出るか……)

レミリアは、二人を連れて袁紹軍の陣営へと歩いて行った。

side:レミリア

不愉快だわ。

案内の兵も周りの兵もみんな、不愉快。

確かに位の低い軍勢ではあるけれど、余りにも無礼だわ。

陣営内の一際ひときわ大きな天幕が眼に入った。

おそらくあれね。

桃香が入口の兵に声をかける。

「すみません、遅れました……」

「いえいえ、お待ちしておりました。どうぞ中へ」
さっき来た兵ね。

他の兵と違って礼儀がしっかりしているのね。

兵士が幕を上げ、桃香・朱里・私の順に入る。

大きな机に地図が広げられて、それを囲むように座っていた。

上座に袁紹おほと思しき人物が座っている。

……何というか、派手ね。

「……待っていましたわ。さあお掛けなさい」

下座に桃香が座り、私と朱里が後ろに控える。

そして軽い自己紹介が始まり、私が名乗るとざわめいた。

二名を除いて……。

「貴女スカレット・デビルの様な幼子があスカーレット・デビルの紅い悪魔とは思えませんわね。私でも倒せ
そうですわ。おーほっほっほっほっほ」

……。

（お、お嬢様、抑えてください！）

（分かっているわ……）

ここは我慢するしかないわ。

「……良く言われますわ。ですが、人を見た目で判断しない方がよろしくてよ?」

上が無礼なら下も無礼ね。

その後、軍議は円滑に進んでいった。

総大将決めではやや滞^{おとど}ったが、他の諸侯の推^{おし}薦^{せん}で袁紹に決まった。

「おーほっほっほ！ 皆さんからの推^{おし}薦^{せん}とあつてはお断^{ことわ}りする訳にはいきませんわね！ おーほっほっほっほっほ！」

なんて単純なのかしら。

これなら、いくらでも利用できるわね。

……ククク、人間の分際^{ぶんざい}で私を辱^{おとし}めた事を後悔^{こうかい}させてやるわ。

「では?水^{みづ}関^{かん}攻^{こう}め^めの先^{せん}鋒^{ほう}は……劉^{りゅう}備^びさん。貴^き女^{にょ}達^{たち}が先^{せん}鋒^{ほう}よ」

ちっ、我^{われ}々^々を捨^すて駒^{こま}にして兵^{へい}力^{りき}を凶^{あや}る気^きが。

「ま、待^{まち}つてく^くだ^ださい!」

「安心^{あんしん}なさい。その後^{のち}ろには私^{わたし}達^{たち}袁^{えん}家^かの軍^{ぐん}勢^{せい}控^{くわ}えていますから、何^{なに}も危^{あや}険^{けん}なことはありませ^せんわ」

高みの見物でおいしい所だけ持って行く気ね……。

「先鋒は武人にとって荣誉ある持ち場。喜んで受けるのは当然のことでしょう?」

「良いでしょう、お引き受けいたしますわ」

「お嬢様!」

「ただし! 我々の条件を呑んで頂きたい」

「なんですの?」

「兵士1万5千の貸与と3ヶ月の兵糧の供給を提示しますわ」

「な!? そんな条件呑める訳が……」

「無論ただで、とは言いませんわ。これを献上いたしましょう」

袁紹の前に懐から出した箱を置く。

果たしてこの奇策が通用するかどうかね。

「なんですの? この小さな箱は?」

袁紹は、箱を手にとって開けた。

「……これはなんの真似ですの!?」

袁紹は、小箱を机の上に叩きつける。

「まさか貴女にはその見事な宝玉が見えないの!？」

『え!?!』

その場にいる全員が箱の中を凝視する。

うまく引つかかったわね。

「その宝玉は私が居た天の仙人が特別に作った物で、暗愚あんぐには見えぬ宝玉なのだけれど……。まさか幼帝を救い出そうと連合結成を持ちかけた袁紹殿が、暗愚だなんてことは無いわよね? 無論貴女には見えているでしょう、曹操殿?」

さあ、貴女ならどう答える、曹操?

「も、勿論じゃない! こんな見事で大きな宝玉は初めてよ。麗羽れいは、まさかこんな立派な物が見えないのかしら? 私の好敵手が暗愚だったなんてがっかりだわ」

「な、何をおっしゃっていらっしゃるの!?! この名家、袁本初が暗愚なわけありませんわよ! ……良いでしょう、条件を呑みませわ!」

ククク……計画通り。

「では、わ、我々は、じゅ、準備があります、のでこれにて失礼」

何とか笑いを堪えながら、天幕を後にした。

「ククク……ハハハ……ア—ッハッハッハッハッノ、ツノ、ツノ、ツノ、ツノ、ツノ、」

「お嬢様、気をしっかり!？」

「プクク……大丈夫よ。いや、まさか本当に成功するとは思わなかったわ!」

「? 成功? 何がですか?」

「何がって、条件の事よ?他に何かあるの?」

おかしなこと聞く娘ね。

「もしかして桃香様、宝石^{アレ}の件を本気にしてたんですか?」

「え!? あれって嘘なの!？」

「当たり前よ!だまされる方が悪いのよ!だまされる方が!」

「良かったー。てつきり私、暗愚なのかなーって心配してたんですよ」

「大丈夫よ。貴女は暗愚ではないわ」

こうして？水関での先鋒は我々となり、陣営に戻った。

「どうでした？」

「？水関攻めで私達が先鋒よ」

「え！？我々がですか！」

「大丈夫よ。袁紹から兵1万5千と3ヶ月の兵糧の補給を貰えるから」

「よく了承しましたね」

「馬鹿と鉄はさまは使しようよ。愛紗隊・鈴々隊・遊撃隊は袁紹からの兵を取り込んで軍を編成しなさい」

『はっ！』

「拍玄、？水関の状況は？」

「はっ！ 守将は張遼・華雄の二人です。兵力は約8万程度だと思われます」

「我々だけじゃ勝ち目が無いですよお嬢様！」

「何も閉じこもった亀の甲羅を叩き割ろうとは考えていないわ。拍
玄」

「はっ！ ご安心ください雛里殿。我に策あり、です。 華雄
は以前、孫堅に敗れた事がございます。軍勢と言葉で挑発をし、そ
の古傷を突けば簡単に出てくるでしょう」

「根拠があるんですか？」

「はい、勿論。鶴が一度、籠城中の華雄隊と対決した際に確認済み
でございます。たった二言で出てきたそうです。……もつとも、勢
いは苛烈でしたが」

「挑発が成功するのは分かりました。ですが、問題は2万5千で倍
以上の軍勢をどう抑えるかです。張遼さんは聡明な方ですので、恐
らく虎牢関に撤退すると思われませんが……」

「それこそ問題無いわ。例え張遼を共だつて突っ込んできても、袁
紹にすべて押し付ければいいのよ。敵が出てきたら一当てし、押し
込まれた振りをして一目散に袁紹軍の背後まで退却。その後、勢い
を失った所で私達が華雄等を捕らえる」

「でもただの後退するだけでは華雄さんも張遼さんも乗ってはこな
いと思います。華雄さん達を釣るためにも、本気で戦線を崩さなけ
ればなりません……」

「しかし戦線が崩れれば、そのまま一気に瓦解する可能性もありま

す。危険な賭になるのでは？」

「そうでもないわ。なにせ連合軍なのだからね」

「他の諸候が助け船を出す？」

「はい。どの軍勢も、こんな私情で始まった戦いごときに負けてられない者達ばかり集まっております」

「自分達の目的達成するために、助け船を出さざるを得ないだろうと」

「なるほど」

「何か異存は？」

「いえ」

「問題無いと思います」

「では、今回の作戦は以上のようにする。朱里、前線に行つて、この作戦の指揮をお願いしたいのだけれど良いかしら？」

「はい！ お嬢様のご期待に添えるよう頑張ります！」

「宜しい。では解散！」

第六話 おぜう様の悪戯（後書き）

如何だったでしょうか？

今回は、いよいよ？水関の戦いになります。

改善点などがありましたら、一言の方に記入お願いいたします。

この作品を読んで戴いた方々と感想を書いていただいた方々、評価して下さった方々、お気に入り登録して下さい方々、皆様に感謝！

第七話 ？水関の戦い（前書き）

おはようございます・こんにちは・こんばんは・初めましての方は初めまして。

第七話です。

華雄に真名がつけました。

やったね、華雄ちゃん！ 真名がついたよ！

由来はあとがきで。

では？水関の戦いをお楽しみください。

第七話 ? 水関の戦い

side: ? 水関

? 水関の門の上に、二人の女性が立って迫り来る軍勢を見ていた。

一人は紫髪で薄紫色の羽織を羽織って、飛龍偃月刀ひりゅうえんげつとうを担ぎ、もう一人は銀髪で大きな戦斧・金剛爆斧を担いでいる。

前者が張遼で後者が華雄だ。

「なあ、月桂げっけい。ホンマに出るんか？」

張遼が華雄月桂に問う。

「当たり前だ霞しあ。今ここで出撃し敵の出鼻を挫くのだ！ お前も来るか？」

月桂は血気盛んにそういうと、張遼霞を見る。

「ド阿呆だーほう！ 出撃しても包囲されて殺られるのがオチや！ それに！ 絶対に？ 水関こゝを死守するようにつて詠や三楹ミンマタに言われたやろ！」

「ふつ、あの大軍を目にして怖気づいたか？ 神速の張遼の名が泣くぞ？ それにここで奴等の将の首級を挙げれば士気を削ぐ事が出来る！ 詠や三楹殿の考えも分かるが、」

霞は止めようとするも、月桂は門から降りて出撃の準備を始める。

「あんのアホンダラ！」

霞は苛立たしげに頭を掻く。

「誰かおるか！」

「はっ！」

下にいた兵が駆け上がって来た。

「月桂が出てもうたら？水関には兵がそんなに残らへん。……できる限り止める努力はする。せやけど、一応虎牢関への退却準備しとき」

「はっ！」

兵は、一礼し駆け下りていった。

(下手したらこの戦負けるかも知れん……。もしもん時のためにうちも洛陽へ行つとくか？……いや洛陽には、詠と橙ちえんがある。橙は臆病やけど、そこそこ強い。詠の知略もあるから最悪の事態にはならへんはず……。いや違ちう！ させる訳にはいかんのや！)

両頬をパンツと叩いて、気合を入れ直した。

「何としても月桂を止めなあかん！」

霞は、月桂を止めるため走り出した。

……

一方？水関前では……。

愛紗が朱里を共だつて仁王立ちしていた。

「我が名は関雲長！ 猛将華雄！ 私と一騎打ちをしろ！！」
しばらく待つが、変化はない。

「どうした！ 武人のくせに一騎打ちを断るのか！？ とんだ臆病者だな！！」

愛紗はさらに声を張り上げる。

続けざまに様々な罵声を浴びせ、古傷を突ついていくが、全く反応が無かった。

「なかなか出てきませんね……」

「ぬう……！ 張遼がうまく抑えているのか？」

「愛紗さん、仕方ありません。最後の手段を使いましょう」

「良いのか？ あれはお前にも被害が……」

「良いんです！ 勝つためです！」

「……分かった」

愛紗は頷くと、大きく息を吸い叫んだ。

「華雄の貧乳
！！！！！」

と。

side:霞

「我が名は関雲長！ 猛将華雄！ 私と一騎打ちをしろ！！」

誘い出す作戦で来たようやな。

ここは何としても月桂を抑えんと……！

「門を開けよ！」

「し、しかし華雄將軍、張遼將軍からは門は何があっても開けるなと……」

「そんなものはどうでもいい！ 一騎打ちの申し出を断るわけにはいかん！」

「しかし……」

「ええい、私の命令が聞けんのか！」

「月桂！ 出撃したらあかん！ ここは死守せんとあかんのや！」
何としてでも止めへんと……。

「どうした！ 武人のくせに一騎打ちを断るのか！？ とんだ臆病者だな！！！」

「おのれええええ！ これでも出るなと言っのか！？」

「言わせたきや言わせときやええんや！！ うちらは武人の前に武将や！！」

「お前は武将でも私は武人だ！！」

「じゃつかあしい！ 屁理屈コネとん場合とちやうんや！！」

「こんの猪はあ！」

「こんなことなら三楹にもきてもら

「華雄の貧乳 ……！！！！」

「な、なんてことをおおおおお！」

「うおおおのれえええええ！！！」

「落ち着かんかい！ 多寡^{たか}が胸の事を言われた程度で激昂してどないすんねん！ 武人やつたら堪えんかい！」

「はなせええええ!! 私は武人の前に一人の女だあああああ!!」

ああもう!!

「貧乳は希少価値や! ステータスや!」

「胸の大きい貴様に何がわかる! は・な・せえつ!!」

あ、あかん! 抑えきれん!!

「行くぞ、華雄隊!! あ奴の首級を挙げ、連合軍に突撃だアアアア!!」

『オオオ!!』

ああ、行ってもうた……。

「張遼將軍」

「ああ、わかつとる。虎牢関まで撤退や……。ああ、三桎にどやされる……」

「心中お察しします」

三桎になんて言えばいいんや……。

s i d e o

u t ……

「来ました！！ 旗は『華』、華雄隊です！ 先頭に華雄！ 鬼の
ような形相です！」

「よし！ 一当てし崩れた様に見せて一気に袁紹軍本陣まで戻るぞ
！ 心してかれ！」

『応っ！』

恐るべき勢いで華雄隊が迫る。

「うおおおおおおお！！ 関羽！！ 出て来おおおい！！
」

「鬼の形相とはまさにこのことだな。三人一組で当たれ！ 左右の
者は前を支えよ！」

月桂の気迫に押されつつ、部隊を展開させて迎え討つ。

華雄隊が関羽隊に衝突する。

「おおおおおおお！！」

月桂は雄叫びを上げ、展開した兵を撥ね退けようと愛紗に迫る。

「今です！」

朱里の合図で、関羽隊は崩れたように見せかけ撤退する。

「はんつ、所詮口だけか！ 前線が崩れた今が好機だ！ 行くぞお
！！ 突撃イイイ！！」

『オオオ！！』

華雄隊は一際大きな雄叫びを上げて、関羽隊を追う。

「追ってきました！」

「よし！ このまま袁紹軍の後方まで退く！ 遅れた者は死ぬぞ！
生き残りたければ死ぬ気で走れ！！」

『オオ！！』

関羽隊は劉備軍と合流し、迫る華雄隊を撒き、袁紹軍の後方にまで
撤退した。

華雄隊は袁紹軍との戦いを余儀なくされ、数の多さに手間取ってい
る。

「被害は！」

「はっ！ 死者529名、負傷者1524名です！」

「流石に多いな。分かった休んでいいぞ」

「はっ！」

「愛紗、大変な役目御苦労さま。張飛隊、遊撃隊は準備が出来次第
出撃！ 鈴々！」

「応！」

「華雄を生け捕りなさい！ 無理なら討って構わないわ！」

「応なのだ！」

「阿門、拍玄、鶴！」

「」「」「応！」」「」

「張飛隊を支援なさい！」

「」「承知いたしました！」」「」

レミリアが指示を出すと、鈴々達は隊を率いて前線へと向かった。

「さて、後は華雄待ちね」

レミリアは椅子に腰かけると頬杖を突いて片目を閉じた。

side：前線

「ええい！ まだ押し返せんのか！！」

「敵が多すぎます！ それにこう、乱戦ではまともに動けません！
！ ここは撤退を！」

「馬鹿を言え！ ここまで来たからには首級の一つでも挙げなければ霞やっに示しがつかん！」

月桂は部下を叱咤しながら、金剛爆斧を振るう。

「ぎゃあああああああ！！」

「何だ！？」

前方の味方が次々と切り飛ばされていく。

「お！ お前が華雄かー？」

「いかにも、私が華雄だ！ けっっして貧乳ではない！！ お前は誰だ？」

（まだ愛紗の言ってた事気にしてたのかー）

「鈴々は、張飛なのだ！ 華雄、いざ勝負なのだ！！」

「良かろう！ 猛将と呼ばれた腕を見せてやる！！ けええい！！」

金剛爆斧を振りかざし、気合とともに振り下ろす。

「遅い！ こっちなのだ！」

大振りの一撃を交わし、すかさず反撃に出る。

「っ！ せえや！」

蛇矛をよけ、先ほどより早く戦斧を振るう月桂。

「くっ！ たりゃ！」

鈴々も負けじと隙を窺い突く。

お互いに牽制しつつ、撃っては受けて、受けては撃つてを繰り返す。

しかし、獲物の重さが勝負を分けた。

月桂は次第に息が乱れ始め、振りも遅くなってきた。

「！ 今なのだ！」

月桂の軸足がふらついた一瞬を見逃さず、レミア直伝の足払いを放つ。

「！ しまっ！ ぐっ！」

月桂は強かに背中を打ち、倒れた。

「勝負ありなのだ。おねーちゃんの負けなのだ」

「ぐっ！ ……やるな。張飛と言ったな。お前は良い将になるだろう。さあ、殺せ」

「残念だけど、そういう訳にはいかないのだ。レミアアには生け捕りにするように言われてるのだ」

「この私に、捕虜になって生き恥を晒せというのか！！ 冗談ではない！！」

「おとなしく捕まってくれないなら、こいつらは惨たらしく死ぬ事になるぜ？」

返り血を浴びて、所々紅い阿門が華雄隊の兵を指して月桂を脅す。

遊撃隊は二人の一騎打ちの間に華雄隊の兵を包囲していた。

「お、お前達！」

「華雄將軍！ 俺達の事は構わずに逃げてください！」

「そうです！ 董卓様をお守りください！」

兵たちは口々に叫ぶ。

「あなたさえ大人しくしてくれればあいつらは死なずに済むぞ？

まだ決心がつかないか？ ならば……おい鶴、適当な奴一人羽交い絞めにしろ！」

「はいよ」

鶴は、目の前にいた兵士を羽交い絞めにして阿門の前に出る。

阿門は小刀を抜き、恐怖に引き攣る兵士の顔に、刃の腹をぺたりと付けた。

「な、何をやる気だ！ 止める！」

「なあに、殺しやしないさ。ちょっと皮を剥ぐだけさ」

阿門は意地悪い笑みを浮かべ、月桂を見る。

「わ、わかった！ お前達の捕虜になる！ だから部下には手を出さないでくれ！！」

「だとさ。部下思いな上司でよかったな。おい、鶴縛れ」

「はいはい。華雄さんやきつめに縛りますが、ご容赦ください」

鶴は、兵を放し月桂を縛る。

「敵将華雄！ 劉備軍、張飛翼徳が生け捕ったのだ！」

こうして、レミリア達は華雄を生け捕った。

第七話 ？水関の戦い（後書き）

如何だったでしょうか？

今回は、陣営パート になります。

三極の正体は次話以降に……。

改善点などがありましたら、一言の方に記入お願いいたします。

この作品を読んで戴いた方々と感想を書いていただいた方々、評価して下さった方々、お気に入り登録して下さいました方々、皆様に感謝！

真名の由来は以下の通りです。

ゲッケイジュ・ローレル

月桂 ゲッケイジュ 月桂樹：栄誉と勝利、幸運と誇り

ミズキ

三極 ミズキ 三極：強靱

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4091m/>

恋姫†project ~おぜう様が逆幻想入り~

2011年12月19日02時45分発行